

次 目

聖訓摘要……………	本多日生
文化史上より觀たる支那事變……………	井上哲次郎
開目鈔講話(第十三講)……………	小林一郎
理想的文化と法華經……………	磯部滿事
時事所感……………	金子光和
記事……………	
○本部關係	
大藏經要義續篇(其八)……………	本多日生
○附費誌料領收……………	

號月一十年二十四第

統

一

財人國統
法團發行

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ露妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ交々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ 第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ 寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎賛助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

本多日生

上野殿御返事

日蓮は刀杖の二字ともにあひぬ。剃へ刀の難は前に申すが如く東條の松原と龍の口となり。一度もあう人なきなり、日蓮は二度あひぬ。杖の難にはすでに少輔房に面を打たれしかども第五の巻を以つて打つ、打つ杖も第五の巻、打たるべしと云ふ經文も五の巻、不思議なる未來記の經文也。(副論遺文錄) 八四二

これは誰しも知つて居る事でありますが、併し如何にも痛切な言葉であると思ふのであります。法華經を修行する者は法難の場合に刀杖の難といつて、刀の難、杖の難に値ふといふことがあるが、日蓮は刀の難は東條小松原に於て景信より眉間に疵を受けた。又龍の口の頸の座に坐つて將に頸切られんとした、越智三郎直重が既に刀を抜き放つたのである、古來佛教の爲に迫害に遭つた人も多いけれども、刀の難に遭つた人は少い、然るに日蓮は二度も生命に及ばんとする刀の難に出會つた。杖の難の方

は龍の口法難の前に、松葉ヶ谷の聖人の庵室に暴れ込んで、少輔房といふのが日蓮聖人の懐申し給ひし法華經第五の巻を以つて日蓮聖人の顔面を散々に擲つたのであります。所が法華行者が左様な難に遭ふといふ事の書いてあるのは、法華經第五の巻の勸持品第十三といふ所に出て居る。法華行者が左様な難に遭ふといふ事の書いてある五の巻を取つて少輔房が日蓮を打つた。日蓮聖人はその打たれた時に、それを取還して擲り返してやらうかと思つて、ヒョツと見ると、昔の經は御承知の通り巻物にした上に紙が貼つてあつて、そこに大きく「妙法蓮華經 卷第五」と書いてある。卷經が澤山並んで居るとどれが何巻か判らんから、外部に大きく書いてある、その振り上げた經に「卷第五」と書いてあるのが、日蓮聖人の眼にパツと映じた譯である、それを茲に書いて居られるのである。「打つ杖も第五の巻、打たるべし」と云ふ經文も五の巻——法華行者が左様に打たれることがあるといふ如來の豫言も法華經第五の巻である、今自分が現在打たれて居る巻物も法華經第五の巻である。實に不思議な事だと日蓮聖人は言つて居られる。諸君、奇蹟といつても是れくらゐ不思議な事はない、人類文化の中に於てこれは實に記憶すべき出来事である。若し西洋の基督の傳か何かに斯ういふ事があつたならば、西洋人などは一人も知らぬ者は無いであらう。基督がある時に於て迫害に遭つて撲られた、それは法華經第五の巻の巻物である、「打たるべし」と説かれて居るのも第五の巻、今打たれつゝある經も第五の巻」といふやうなことが若しもあつたとしたならば、基督教徒は非常に之れを吹聴することであらうと思ふ。日本人は佛

教を信じて居りながら妙な事を頭腦に入れられて、毒を服まされて居るものであるから、法華經の爲に法難に遭つた日蓮聖人を寧ろ増んで、石をぶついたり、痰を吐きかけたりした方の、癩病系統の人間が多きものであるから、さういふ事を聞くと「俺も一つ石をぶつけてやらうか」といふことになる。洵に判断が迷つて居るけれども、之れをスラリとした精神から考へて見たならば、法華經は譯の爲に説いたものでもない、一切衆生の爲に釋迦牟尼佛が出世本懐の妙經として説かれたのである、誰がその法難に遭つかそれは未來の事で、釋尊の當時からいへば二千數百年以後の事である、何も釋尊が日蓮聖人に身最負をしてさういふ事を言つた譯ではない、全く日蓮聖人が法華經の爲に盡されることに依つて、この法難に遭はれたといふ事は、如何にも不思議な事である。

饑へて食をねがひ、渴して水を慕ふが如く、戀ひて人を見たまが如く、病に藥を憑むが如く、容貌よき人紅、白粉をつくるが如く、法華經には信心をいたさせ給へ、さなくしては後悔あるべし云云。

(繪圖遺文略
一八四四)

これはこの御書の末文であります、信仰の意味を判り易くお示しになつたので、信仰といふものは、腹が減つて仕方がない時分に食物を求むるが如く、咽喉が渴いた時に水を欲しがるやうに、自らの精神にそれが燃え立つて現はれて來なければならぬ、唯だ居眠り半分でもお題目さへ唱へて居つたら宜いといふやうな議論が、日蓮主義には未だ中々強いけれども、腹が減つて居る時に食物を求めるとい

ふのと居眠りをして居るのは違ふだらう、腹が減つて仕方がないといふ時には「ア、何か食ひたい」「牡丹餅が食ひたい」「餅が食ひたい」「握り飯でも宜いから食ひたい」といふ熱誠といふものが其處に起つて来るだらう。水が飲みたいといふ時でもさうである。諸君は咽喉の渴いたことがあるか無いか知らぬが、本當に咽喉が渴いたならばモウ何も他の事は考へない。私は青年の時代に旅行をして、山を歩いて居つた、丁度春先きのことで山越をして居ると汗が出て仕方がない、所が山の上で水が少しもない咽喉が盛んに渴いて来る、モウ山の登り口から渴いて居つたのをツイその儘上つてしまつたので、段々登つて行く程咽喉が渴いて来る、さうなると何も他の事は考へない、何處かに水があつたら飲まうと思ふけれども、その邊何處にも水が無い、所が谷の底の方を見ると、雪の解け残つたのが在る、けれども崖が急で逆も下りられない、「彼處に行つたらあの雪を食へるナ」と思ひながら、どうしても行くことが出来ない、さうなると益々咽喉は渴いて仕方がないから、谷を眼下に見ながら其處に腰をかけて「アあの雪が食ひたい食ひたい……」と思つて居つた事がある。實に咽喉が渴いた時に渴して水を求めるといふ時は、全く餘念が無い、本當に咽喉が渴いたことの無い者は、唯だ酔ぎめの水を飲むといふ位のこと、「好い心持ちや」位に思つて居るけれども、中々どうしてそんなものではない。軍隊などでも、出征でもした人は能く知つて居るでせう、日露戦争時分に滿洲あたりで、あの渴つた水を飲んでならぬと言はれて居るのに、咽喉が渴くものであるから何と言はれても構はない、泥水をみな飲んだと

いふことである。左様に渴して水を求むるが如く、信仰といふものは自分の心から燃え立つて行かなければいけない。又「戀ひて人を見たきが如く」——自分の戀ひ慕ふ人間に會ひたいと思ふ精神、それは「今日は少し雨が降つて居るからマア延ばさう」といふやうな譯のものではない、雨が降らうが風が吹かうが、どうしても會ひたいといふので、亞米利加なら亞米利加に行つて居る夫を慕うて、船の嫌ひな女が船に暈ても、「モウ何日辛抱をすれば夫に會へる」と思つて行くやうに、その戀ひ慕ふ人間を見たきが如く、その憧憬れの精神が信仰である。又「病に藥を憑むが如く」——病に罹つて居る人間が藥を與へられて、「モウこれは難病で癒らぬかも知れんけれども、茲に一種の靈藥があつて、之れを服めば癒るであらう、他の物では癒らぬが不思議な靈藥を發見した」といふので、その藥が何處々々にあると聞いたならば、山の奥であらうが谷底であらうが、その藥を求めてそれを服まうとする精神、その如きものが信仰である。その次は「容貌よき人、紅、白粉をつくるが如く」——女などが美人ならモウそれで宜いかという中々さうでない、美人ならば尙更綺麗に髪を結び、紅をつけ、白粉をつけるやうなものである。自分の信心がモウ立派だからと言つて、散バラ髪で穢ない顔をして居るといふのではない、美人も尙且つ紅を施し白粉をつけるが如く、信仰は彌が上にも之れを美しくし、之れを立て派にして行かなければならぬといふ事を言はれて居る。この意味を法華宗の人が了解しないで、美人でもないお鍋が散バラ髪で飛出すといふやうなのが、今日のドンドコ法華といふものである、逆も見られ

たものではない。

實に信仰といふものは新しくあるべきものである。さうさへすれば必ず法華經の御利益が得られるけれども、さもなくして上の空で法華經を信じたのであつたならば、「さもなくしては後悔あるべし」——唯だ休み言葉のやうに「イヤ、法華は信心さへすれば宜しい」といふやうなことを上の空で言つて居つたのでは、後に至つて後悔する事が出来るであらうと仰せられて居るのである。教は眞實の所を打ち込んで行かなければならない、「そんな面倒な事を言はないでも、こつちは南無妙法蓮華經を唱へて居れば宜いのだ」といふ。それではいかぬ、さういふ事は生ぬるい教である。浮の空で唱へる題目は蟬が鳴くのと同じだと傳教大師も言はれて居る、それはその方が本當である。頭惱の中では何も考へて居るのではない、「餅が食ひたい」といふやうなことを考へながら「ア、餅が食ひたい南無妙法蓮華經……」あ會式に池上に行くのでも、何も教の事など考へて居りはしない、「向ふに娘が行き居る、早くあの娘に追いついてやらう、南無妙法蓮華經ドンドコ……」さういふやうな信仰意識といふものはどうしても矯正しなければいかぬ。何も面倒な事はないけれども、清い正しい精神に戻つて、素直に、今の所謂病に罹れる者が藥を憑むが如く、渴して水を求むるが如く、一心清淨に南無妙法蓮華經と唱ふるのになければならぬ。何も長い時間を要求しない一念で宜しいのである、その一念といふものは清い精神を要求するのである、二念、三念といふのではない、一念といふのであるから、その一念といふものは上

等でなければならぬ。例へば種痘なら種痘をするのに、醫者がチヨツチヨツと施る、これで種痘が済んだのかと思ふやうに簡單な事である、けれどもその代りその痘苗といふ物は精製して置かなければならぬ、氣の抜けたやうな種を何遍やつた所が、それは百遍種痘をやつても、種が駄目になつて居つたら何の役にも立たぬ、本當の種を持つて來なければならぬ、さうすれば一遍で宜いのである。それには皮膚から毒の入らぬやうに、先づアルコールで消毒して施るが如く、信仰も先づ精神を清めてかゝらなければならぬ、それは何も難かしい事はない、精神を落つけてさうして、南無妙法蓮華經と唱へて行くといふ事である、これが難かしいなどといふのは、その人が寧ろ法華經に對する謗法の人である。

新池殿御消息

我朝人王九十一代の間に謀叛の人人は二十六人なり、所謂大山の王子、大石の小丸乃至將門、純友、悪左府等なり。此等の人人は吉野十津河の山林に籠り、筑紫、鎮西の海中に隱るれば、鳥々のえびす、浦々の武士ども撃んとす。然れどもこれは貴き聖人、山、寺、社、法師、尼女人はいたう敵と思ふことなり、日蓮をば上下の男女、尼法師、貴き聖人など云はるゝ人人は殊に敵となり候。

(縮刷遺文)
一八四八

これは何を仰せられるのかといふと、茲に日蓮聖人の思召の非常な大事な點がある、それは日本に就

ては勤王の大義といふことを大事にお考へになつて居るから、日本が始つてから人皇九十一代、その間に謀叛をした者が二十六人あると仰せられて居ります、その二十六人の中に悪左府と言つて北條義時を謀叛人にお加へになつた。北條時代の勢威熾んなる代に、北條氏の先祖である義時を謀叛人と仰しやつたのである、丁度徳川の熾んな時分に、徳川家康を東照神君と言つて非常に崇めて居るのを、それを攻撃すると同じやうな譯で、北條氏の熾んなる時に義時を悪左府と言つて謀叛人にお加へになつた。それが爲に頸の座にもお坐りにもなり、それが爲に迫害が起つたのであるけれども、日本の國體よりして論ずれば謀叛の者ぢやといふ事を、茲にはつきりと仰しやつたその點が一つ。

さうしてそれは何から例に引かれたかというところ、やはりお釋迦様の事から仰しやるのである、日本の國體で言へば天子様に謀叛をすれば、それがどんなに勢力があらうが、當時鎌倉の勢力に皆が従つて居つても、間違つたものは間違つたと言はなければならぬ。どんな宗旨が蔓つて居らうが、お釋迦様を粗末にするやうな宗旨といふものは、鎌倉が天皇を忘れて勢力を得て居るのと同じものぢやといふ事を日蓮聖人は論じて居られる。その「勢力」といふものを以つて佛法を見るといふことはいかぬ、勢力を以つて見るから、鎌倉が勢力を得ればその勢力に皆が屈従するといふことになるのである。併し尙ほこれに就いて言ふべき事があるが、是等の人は謀叛人であるから、假令吉野の山に隠れやうが、鎮西の嶋の中に隠れやうが、心ある者は「それは朝敵ぢや」といふことにして之れを敵とするであらう、けれども山

に住んで居る所の坊さんであるとか尼法師といふやうな者は、唯だ佛法の信心の方に入つてしまつて居るから、北條義時が天下を奪つても別にこれを悪人とも思はずして、北條の武運長久を祈るといふやうなこと、心ある者は之れを朝敵謀叛人といふけれども、心無き尼法師等は敵とは思はぬであらう。然るに日蓮は總ての者が之れを敵として居る、謀叛人よりも優つて日蓮を敵にして居る、それは却つて佛法の事を心懸けたやうな人が、日蓮を敵とする譯である、上下の男女、尼法師みな日蓮を敵とするやうな譯であるが、それも間違つた事である。北條の武運長久を祈つて日蓮を惡僧と叫ぶといふことは何事であるか、假令身は尼法師であらうが、山寺の坊主であらうが、日本人である以上は國體の何たるを知り、法華經の尊きことを知らなければならぬ、尼法師であつた所が日本人であらう、尼法師であつた所が釋迦の教を奉じて居る者であらう、二十六人の謀叛人の事ぐらゐは尼法師でも皆知らなければならぬ、然るにその大義各分も判らず、佛法の邪正も判らぬといふのは、如何にも歎かましいといふことを仰せられて居るのである。

今もやはりさういふ者が澤山残つて居る、さうして却つて日蓮聖人を敵視する人が中々多い、今でも宗旨が違つたならば多くはさうである。今度日蓮聖人の銅像が出来まして、岡崎先生の工場に假にそれを見て、私共行つて拜んで參つたのであります、非常に立派に出来て居る、これから相談をして、本當の場所に建てる間に、今度の平和博覽會場、或はその附近に之れを移して、さうして數百萬の來

會者にこの日蓮聖人の尊像を拜見させたいと思つて居る。併し今日では段々滅つたらうけれども、未だやはり「これが念佛無間と言つた惡僧ぢや」といふやうな事を言ふ者が段々居る、却々日本人は佛法の邪正といふ事に就いては判らぬ者が多い。法華經に味方し釋尊の爲に働いた日蓮聖人を何故に敵視するかそれは、恰も北條の時代に北條の武運長久を祈つた頭腦と同じ事でありませう。

彌蘭王、那先比丘に問ふて言く、
 人未だ涅槃の道を得ずして如何ぞ涅槃の樂たることを知るや。
 那先言く、
 人生れて未だ曾て手足を截らざるも能くその痛みの刺しきを知るは、他の手足を截れるものの呻吟するを見るによる。前の聖者既に涅槃の道を得てその樂みを語る。此を以ての故にその樂なるを信するなり。

——那先比丘經——

文化史上より觀たる

支那事變

井上哲次郎

緒言

文化史上より支那事變を詳しく論ずることは容易の業ではないけれども、只支那事變として論ずるよりは、廣く文化史の方面より概論することは無益でなからうと思ふ。

東洋の老國

支那は東洋の舊國で、而して西洋文化に接觸したのは、日本よりははずと古い歴史を有して居るのである、然しながら、支那は何らも自ら「中華文明の

國」と考へて、眼の醒めることが日本よりは數十年後れて居る。今から九十九年前に、支那に於ては阿片戦争が起つて、それが四年間繼續した。阿片戦争といふのは、英國が印度の阿片を支那に輸入して、支那民族の生活力を打ち壞すやうなことを遣つたために起つたのである。いつたい英國は支那の爲めに有害なことをして、恬然愧ぢないで、金さへ儲ければよいといふ態度を採つたのは實に恥べきことであつた。阿片戦争の原因は支那の方に十分の理由もあり、世界に向つて堂々と之を主張すべきであつた

たが、如何にもそのやうな感じがあつた。

革命後の政體

それから十年経つて、かの明治三十七八年の日露戦争となり、日清戦争よりはずつと激しい大規模な戦争が支那の領土内に於いて行はれた。露國は歐洲諸國の間に怖れられて居つた國であり、且つ武器も日本より勝れて居つた國であつたに拘らず、矢張り頭我が日本の軍隊に打ち敗かされてしまつた。是は唯日露の戦といふのみならず、有色人種と白色人種との戦、亞細亞民族と歐羅巴民族との戦で其の結果如何といふことは世界の視線の集る所であつたが矢張り日本が眼覺ましい勝利を得て戦争は終つた。是にはさすが支那も大分強大な刺戟を受けたものと見えて忽ち留學生が數千人日本に遣つて來たのみならず、支那の政治家、學者、教育家、其の他いろいろな人が視察の爲めに遣つて來たやうな次第で、大分

けれども、何分支那の方は外交も拙くして、而して戦争にも弱く、遂に香港を割讓して英國に與へ、上海を初めとして五箇所を貿易港として開くに至つた。是が實に支那の大なる恥で、あの時に支那は十分眼が醒めなければならなかつたが、少しも眼が醒めなかつた。それから明治二十七、八年の日清戦争は誰も知つて居る通り、支那が朝鮮に對して野心を抱き朝鮮を支那の領土としようとしたことから日清戦争となり、而して支那の敗北となり、臺灣を割讓したのみならず、遼東半島をも割讓するやうになつたけれども、遼東半島は遂に我が日本から支那に還附するやうなことになつた次第であるが、兎に角支那が日本を小國と侮つて居つたに拘らず敗北したのであるから、あれで何うしても眼が醒めなければならなかつた。ところが、矢張り其の後も日本を侮るやうな態度を改めないで、何うも眼が醒めなかつた。其の頃我が日本では支那を「眠れる象」と云つて居つ

支那も眼が醒めて來たやうに思はれた。まあ十分眼が醒めたとは云へないにしても、餘程強い刺戟を受けたことは疑ひ無い。まあ其の結果であらう、明治四十四年に至つて、支那に於いては革命が起り、其の翌年革命が斷行されて、中華民國となつたが支那の革命家は我が日本の國體に倣ふことは困難でもあつたであらうが、日本に對する一種の反感も加つて米國の政體に倣ふやうになつた。それで共和政體を採るつもりで、初めは大總統を立て、議會を開き、國政を議する代議士を選擧し、大分憲政の實を擧げようとしたけれども、何うもそれが支那には旨く行はれなかつた。今日のところでは、支那は人民の選擧した大統領も居ないし、又人民の選擧した代議士も居ない。又、議會も曾て開いたことがあるけれども、弊害百出の爲めに閉ざされてしまつた。それで今日の支那は共和政體ではない。それならば何と云ふ政體かといふと、軍閥的專制政體と云つたならば

よからうと思ふ。稍々我が國の室町時代の末のやうな工合に、各地方に兵力を有する軍閥がある。例へば山東省には韓復榘があり、山西省には閻錫山があり、綏遠省には傅作儀があり、廣西省には李宗仁があるといふ工合に、諸所に軍閥がある。併し其の中で巨頭は何と云つても蔣介石で、蔣介石は全支那を統轄すべき地位にあるが、然し其の統轄は旨く行つてゐないことは事實である。併し蔣介石は今では獨裁權を有して居るものゝやうである。但し、今後共產黨が勢力を得て來れば何うなるか、それは不明であるが、現在のところは今云つたやうな次第である。

そこで、更に進んで注意すべきことは、支那事變以來日々報道されてゐるやうに、北支那に於ても中央支那に於ても南支那に於ても日本の海・陸・空三軍の戦功は赫々たるものが、優に支那四百州を威壓するの狀態にあるのである。支那は武力に於ても財

力に於ても教育に於ても、其の他殆ど總ての點に於て確に劣弱で今日に於ては最も甚だしい窮迫の狀勢に陥つて居るやうである。支那は初め長期の戰爭をするやうに廣言して居つたけれども、逆もそれは不可能なことであらう。

道義觀の類廢

いつたい支那は何ういふ點から見ても、文化的に日本より遂に劣弱である。是が支那と日本の戰を交へても、勝利の見込の無き所以である。人口は日本より多く、土地も日本より廣いけれども、それだけでは日本に勝てるものではない。戰爭は唯々戰爭だけで勝敗が決せられるものでない。戰爭の背後には矢張り道徳だの教育だの、それから資力だの、社會の組織だの、國家の體形だの、總てが關係して居るものである。是に就いて少し自分の見る所を述べてみようと思ふ。

變前に風岡一雄といふ人の編纂した排日教科書を讀んでみたところが、支那では極端な排日思想を説いて、青年學生を教育して居つた。而して自分の國の不都合な事は皆棚に上げて少しも説かないで、總て外國、殊に日本が支那に對して甚だしい侵害又は強迫を遣つたやうなことが書いて、對日的敵愾心を養成するやうに努力したのである。餘りに歪曲したる教育の仕方であつた、而して少しも青年學生を立派な良心有る人格者として養成することを努力して居らない。是が支那の爲めに最も不利なことであつた。支那を世界の強國たらしむるには、次代の國民を立派な人格者たらしむることが一番有力な方法であるのに、上述のやうな甚だしく對外的に偏狭な精神を養成することのみ遣つて來たがために、支那に於ける人道の精神は殆ど地を拂つて無くなつた。彼の通州事件などのやうな、甚だしい非人道的のことを遣つたのは當然の結果である。其他上海に

第一、支那は昔は孔、孟だの、それから朱子、王陽明だの、隨分聖賢が出て居るけれども、次第に文化的に衰退し、中華民國となつては傳統的思想が地を拂つて無くなつた。傳統的の道徳思想は過去の聖賢の精神的遺産で非常に大切なものであるが、之れを中華民國となつて、悉く棄て去つてしまつた。而して是に代はるものが無いこれがいけない。何等道徳的の標準が無くして、唯自由解放で、何事を遣つてもよいやうな社會となつたのであるから、道徳上のアナキーを現出した次第で個人々々の良心を尊重する精神が無い。而して中華民國では今に憲法を制定しないで、三民主義を遵奉して居るが、三民主義の中には何處にも良心だの人格だのは説いて無い。三民主義では人氣は悪くなるばかりで、風俗類廢は其の底止するところを知らない有様である。其の上排日教育を行つて來たので、人氣は益々荒んでしまつた。排日教科書を見て自分は驚いた。丁度支那事

於いても非戦闘員を攻撃するとか、又赤十字の旗を掲げて居る病院船に砲撃するやうなことも遣り、それから日本の砲撃を免るゝがために、日章旗を掲げたり、其他道徳的に話にならぬやうな事を屢々遣つて居る。支那の新聞と云へば戰爭に關して兎角嘘を書くことが多く、又支那の電報の如きも、事實に反したことを報道する爲めに信用されない。それから又、支那の外交官などが歐米諸國に於て今回の戰爭に關し事實を歪曲して、得手勝手な虚偽を宣傳しつゝあるのも覺察に堪へないのである。さういふことをいろ／＼綜合して考へてみると支那の道徳心の甚だしく低下して殆ど全く缺乏して居る事が分る。第一、支那は何うしてもあの三民主義を撤廢してしまはなければ良くならない。外國品に對してボイコットを遣り、總て外國品を支那の市場から排斥するやうな考へは三民主義に原因してゐるのである。それで排日思想も矢張り三民主義から來るのである。

三民主義といふものは讀んでみると、實に愚劣なもので、あのやうなものを中華民國で金科玉條としてゐる間は何うしても我が日本及び其の他の國々に對して亂暴な事を仕出かすことは鏡を掛けてみるより明かである。

傳統的精神の尊重

三民主義の初めに孫逸仙が「日本を學べ」と書いて居る。その日本を學べといふのは、維新以來日本が歐米の文化を輸入したことを意味してゐる。支那も日本のやうに歐米文化を輸入して進展を圖らねばならない、斯う云ふのである。それだけならばよいが他方面が分つてゐない。日本は如何にも歐米の文化を輸入したのみではない、日本では其の傳統的精神を以て歐米文化を輸入し、能く之を咀嚼し、又之を消化したのであるけれども、併し今日にあつても尙ほ依然として祖先の道德的遺産を承継して居る

兵部に獻金する者さへある。此の違ひは何處から來るか。我が日本の教育は固より幾多の缺點があつても、支那の教育よりはずつと進んで居る。立派な人格者を養成することを眼目とし、外人に對して、決して無法なことをしないやうに教へてある。それで日本が支那より強いのである。何と云つても國民道德がズツと進んで居る。そして又國家の基礎が遙に強固である。試みに國體の上から云へば、申すも畏いことであるが、天皇陛下の賜はる勅語は日本國民一般謹んで之を奉體せざる者は無いのであるが、支那に於ては蔣介石の命令はなかなか徹底しないで、而して今や蔣介石に對する怨嗟の聲は四方に起つて居ると云ひ傳へられて居る。尤な事である。我が國に於ては、皇后陛下を始め奉り各宮妃殿下の御作製に係る細帯を頂戴した傷病兵は何れも感泣して奮起せざる者は無いのである。是は皆我が國體の然らしむるところである。現今の支那の不統一甚だしく

のみならず舉國一致皇統一系の國體を奉體し、これを永久に續けて行くことになつて居る。孫逸仙などは日本が唯歐米の文化を輸入したことだけを知つて日本の傳統的精神の變らないことを知らない。これを一知半解といふ。支那にも孔・孟・朱・王の傳統的精神があつたではないか。淺墓にもそれを打ち壊してしまつたから、何も無いやうになつて、道德上のアナキズムを現出して居る。其處に甚だしい缺陷があるといふことに支那は眼が醒めなければならぬ。支那に於いては通州事件を初めとして、非常な非人道的なことを遣つたのに對して特に注意すべきことは、我が日本に於いて今でも一萬數千人の支那人が滞在して居るであらうけれども、彼等を迫害するやうなものは一人も居らぬ。警視廳が在留支那人を保護してゐるやうであるけれども、保護しないでも、在留支那人に對して無法なことをする者は斷じて無い。それで在留支那人の中、我が陸軍省の植

して、動もすれば分裂せんとするに反し、我が國に於いては全國民一致協力して、國家の基礎磐石より鞏固であるといふのは今更云ふ迄も無いことであるが、之れを支那に對照して考へてみれば、我が國體の支那の夫れより遙に優秀なるのみならず、世界各國の間に決して匹敵無きことを斷言して憚らざるところである。

結論

未だ支那事變の成行如何は容易に豫測すべからざる状態であるけれども、是は徹底的に遣らないと好い結果は無いと思ふ。蛇の生殺しのやうなことではいけない。支那は少し困れば英、米、佛、露の國々に泣き附いて、仲裁を請ふであらうけれども、決して他國の仲裁を容れてはいけない、本當に困つて和睦を乞ふならば、直接日本に對して申込まなければならぬ。英、米、佛、露が仲裁に入るといふこと

は複雑な問題を惹起する端緒となるの虞がある。英國などいふものは利益を主とする國であつて、案外人道を顧みなかつた歴史が多々ある。英國は是道人道を表面の盾として、實際は利益を眼目として巧妙なる手段を執るやうなことを度々遣つて來たものである、我が國民は決して英國などに誑されてはならない、兎に角今回は支那を懲罰することを始めた以上は最後迄斷行し、而して支那をして其の舊惡を改めしめ、而して支那の困窮した人民を救ふことを圖らなければならぬ。そのためには、北支の各都市に起りつゝある治安維持會及び其の聯合會を守り立て、新しい支那の永久平和の基礎を築くことに努力し、南京政府を離れた永久平和の新支那を王道樂土として建設することが我が日本に科せられたる重大の任務であると思ふ。

僧と爲りて僧なることを知らず。
 營々として俗事を務む。
 經を讀みて禪寂に違し。
 律を誦して放肆を致す。
 心に差別の相を存して。
 口に圓融の理を説く。
 世に癡暗の人多し。
 轟々として爾に歸依す。

——草山集——

開目鈔講話

(第十三講)

小林一郎

この間は、法華經に於て壽量品を説かれない間は佛様といふことの本當の解釋が出来ない、成佛してから四十餘年にしかならない教主釋尊が、この短い間に於てどうして澤山の菩薩を教化されたのかといふ疑に對して、その疑を解く爲に壽量品を説かれた、斯ういふやうな所を讀んで居つたのであります。ところがその壽量品を説くに先つて一イキナリ壽量品を説かなかつた。そこが又用意の深い所でありますが、『教主釋尊此等の疑を暗さんが爲に、壽量品を説かんとして爾前・迹門のきゝを擧て云く』と

あります。「きゝ」といふのは、聽いて皆が理解するその心持を察して言はれる。一切世間の天人及び阿耨羅は、皆どう思つたかと言ふと、今の釋迦牟尼佛は、釋氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三菩提を得たまへりと思つて居る様子だ。ところが實はその時初めて覺つたのではなく、「然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佉劫なり」斯う言はれた。このことは、兩方考へなければいけないです。我實に成佛して已來久しい、斯う言はれた。これは、

修行をして佛に成つたといふことは詰らないことだ、斯う言ひ切つたのではない。さういふ風に解釋しては、これは大變間違ひなのであつて、修行して佛に成つたといふことも大事なことであり、それから昔から佛であるといふことも大事なこと、修行して佛に成つたといふことを詰らない考へ方だと言はれた譯では決してない。修行しないで佛に成れるものではないのでありますから、その所は餘程私は大車だと思ふのです。どうも法華經をやる人がその所をいゝ加減にしてしまつて、『ナーニ初から佛に成つたのだから、修行などはいゝ加減なものではないか』といふやうな考へになり易いのであります

すが、決してさうではないので、お釋迦様は成程遠い昔からの佛様でゐらつしやつたのだが、そのお釋迦様が娑婆世界に出て教をお説きになる際には、決して唯教をお説きになつたのではなくて、御自分が所謂菩薩行を積んで、難行苦行の數々を積み重ねて

斯の如く努力しなければ、幾ら皆佛性を具へて居ても、その佛性を發揮することは出来ないぞといふ活きた手本をお示しになつたもので、その所は大變大事なことである。人間が骨を折らないで善い事をしようといつても、そんな考へはまるで駄目なのであります。ですからこれは兩方大事なのです。本來佛と成る性質を具へて居るといふことも大事でありまし、又その尊い性質を發揮する爲には努力をしなければならぬといふことも、これは尙更大事なことでありませぬ。

今までも法華經の御話などを申上げる時に時々申上げましたけれども、『疾』とか、『速』とか、『頓』とか、斯ういふ字が始終使はれて居るものですから斯ういふ言葉にチョット引掛つてしまつて、『ナーニ法華經を讀んだら其時から直に佛様に成つてしまふのだ』といふやうに考へるのでありますが、『速』と云ひ、『疾』と云ひ、斯ういふ言葉は『はやく』と

いふ意味ではない。他の道を通らないでといふことなのです。此の道をやつて行けば、他の道を通らないでも、この道で一生懸命に行けば、この一筋の道で行けるぞといふ爲に、或は『即』と云ひ、『速』にと云ひ、『頓』と言はれるのであつて、決して骨折をしないでチツとして居さへすれば難く佛に成れるぞといふやうなことは何處にも言つてない。その所は餘程注意しなければならぬと思ひます。これは決して私などが勝手なことを申上げるのでなくて、御存じのやうに法華經の中に授記といふことがあり

ますが、授記を讀んで見れば判ることです。舍利弗を初め大勢の弟子達に、お前達は未來に於て必ず佛に成るぞといふことをお許しになるのに、無條件でお許しになつた場合は一つもありはしない。今からこの心持を改めずして、これから後に於て澤山の佛に仕へて、澤山の佛に供養して、澤山の善い事を積んで、その後が一番終ひに佛の境界になるのだ、斯

ういふことを言つて居られる。その条件なしに佛に成るぞと許されたといふ場合は決してない。こゝに注意しなければならぬ。吾々凡夫が一足跳びに佛のやうな境界などに行ける譯のものではない。その骨折は餘程覺悟しなければならぬのであります。若しその骨折を厭ふやうなことなら、これは逆も仕様がないのであります。吾々の生命は何も五十年や六十年や、百年や二百年の生命ではない、永遠の生命なのだから、骨折る位のことには覺悟しなければならぬ筈なのです。

これは餘程色々な方面に亘つて考へなければならぬことだらうと思はれるのであります。勿論無駄に骨折ることが宜いとは言はれて居りませぬ。無論無益な骨折は避けなければならぬことは謂ふ迄もない話です。何でも骨折つたら宜いといふ譯のものではない、下らない事に骨折つたつて効目はありません。唯骨折るのが宜いなら、電車の後を一時間も追

掛ければ随分骨が折れるのですけれども、それではチツとも覺れも何にもしないのですから、下らないことに骨折ることは廢した方が宜い、だから法を選ぶ、正しい教を選ぶといふことが必要なことですが併し一度選んでこれが正しいと思つたらば、その正しい教を修行する上に於ては骨折りを厭はない、斯ういふ決心をしなければならぬ筈です。そこは二つ考へなければならぬ。選ぶことは必要です、下らないことに頭を突込んで拔差しならぬことになつては

仕様がありませんから、一番良い教を選ばなければならぬ。その選ぶ爲にはいろ／＼條件もあり、いろ／＼の教も與へられて居る譯であります、一度選んでこれが正しいと思つたならば、その正しい教を修行するに於ては、努力は無論しなければならぬ、斯ういふのでありますから、お釋迦様が永い間修行して、然る後に覺をお開きになつたといふことも無論大事なことであり、又その覺られるといふ

根本に於ては、佛と成るところの本性を具へてゐらつしやつたといふことも大事なことでありまして、これを片手落のないやうに考へなければならぬのであります。

華嚴・乃至般若・大日經等は、二乗作佛を隠すのみならず、久遠實成を説きかくさせ給へり。

「二乗作佛」といふことも法華經以前に於ては認められて居ない。この二乗作佛のことは、前から申したことから、今日は簡単に致しますが、要するに小乗の教を修行しても、その小乗の教を修行したことが無駄にならぬといふことです。それが二乗作佛といふことの根本の精神です。そこが大事なことです。大きな事に力を打込んで見ると、小さい事に骨折つたのは無駄にならなかつたのだといふことが解る。ところが大きな方を考へないで小さいところ

だけでやつて居るなら、その骨折が無駄になつてしまふのだから、そこがまア着目すべきところである。譬へば京都まで行くとして本當に京都に着いたら、横濱を通つたことも、沼津を通つたことも、静岡を通つたことも、一つも無駄ではない。併し途中で静岡邊りを下りてしまつたら、結局京都へ行けないのですから、横濱や沼津を通つたのは皆無駄になつてしまふ。だからつまりその努力を續けて行けば、今までの努力は無駄にならない。併し努力を續けなければ、今までの努力は全部無駄になつてしまふ。それで法華經を説かれる前には、小乗の教を學んだ者はいけないぞ、駄目だぞといふやうなことを極力言はれるのです。駄目だぞと言ふことは、見離す積りで言はれるのではない。そこで止つたらいけないから、モウ一層奮發しろ、斯ういふ御慈悲の心持から、小乗で止つてはいけないといふことを言はれる。それを取違へて「何だ、折角小乗の佛様の教で

修行したところが、無駄だと言つて突離された、悲しいことだ」といふ風に思つては、佛の慈悲は解らないことになるのであつて、佛は何時でも「モット進め、モット進め、そこから止つてはいけないぞ」といふことを絶えず言つて居られる。それはまア法華經に至つて初めて解ることです。小乗の教で以て世の中の無常を感じたといふことも無駄にならぬ。更に進んで大慈悲の心持を以て一切の人を救はうといふ決心をすれば、今までの修行は皆役に立つぞ、斯ういふことが所謂二乗作佛であります。又吾々の日常生活に付てもさうでせう。「不求」求めないといふ心持を起すことが、與へるといふ心持を起す本になるので、求めるといふ心持が胸一杯でありましたら、與へるといふ心持の起る餘裕はないのです、だから小乗の教といふものは、要するに求めない心持です。これを起すのが小乗の教で、金も要らない、地位も要らない、名譽も要らない、

人から何にもして貰はないでもないといふ、この求めない心持を作るといふのが小乗の教である。求めざる心持があれば、今度は進んで與へようといふ心持が、そこから自然に出来て来る譯であります。欲しい／＼と思つて居たら、中々人にやるだけの暇はありません、そんな餘裕は心に起きないのですから……しかし唯だ求めないといふだけの心持で居つたのでは、それは何だか解らなくなつてしまふ。金も要らない、地位も要らないといふことであると、終ひには覺りも要らなければ、學ぶことも要らないといふことになりませうから、たと要らないといふだけでは詰らないでせう。併し要らないといふ心持があつて、初めて更に意義のある方に自分の心持を打込むといふことになるのですから、さうすれば小乗の教で修行したといふことが一つも無駄になりはしない、それが『二乗作佛』です。所謂聲聞、緣覺といふやうな二乗の者が、小乗の教で覺を開いたその

骨折が、更に一切の人を救ふといふ慈悲心と結付いて、初めて今までの骨折は一つも無駄にならない、皆尊いものになる、斯う言ふのであります。

その意味を天台大師がお説きになつて、『妙とは蘇生の義なり』と言はれたのは、非常に意味が深いと思ひます。蘇生なのです、無駄になりさうなものが生命を持つて来る。低い教を修行して、モウそれで終るならその修行は無駄になつてしまふ、死んでしまふ、けれども更に進んで高い方の教を習へば、その低い方のを習つたのが又蘇生つて来る、又生命を持つて来るから、そこで『妙とは蘇生の義なり』斯う言はれた言葉は非常に深い意味がある。吾々が妙法華經を學ぶといふことは、その蘇生する道を學ぶのです、自分達が佛様のやうな心持を以て世に立つ上に於て、今までやつた骨折が皆蘇生つて来る、どれも無駄になることはありはしないといふことを、シツカリと考へるのであります。それが所謂

『二乗作佛』でありまして、これを法華經で初めて明かにされるのでありますから、法華經に來ないまでの經典は、大乘の經典であつてもまだそこは言はなかつた。

それから又『久遠實成』即ち佛様がこの世で御修行なさつて初めて佛様にお成りになつたのではなくて、遠い昔から佛様であつた。この前申上げた『本佛』といふ根本の佛様が、この釋迦牟尼佛となつてこの世に現れて教をお説きになる。又吾々共もその本佛のお力に依つて、佛性といふ佛に成る性質を具へて居るのだから、この佛に成る性質と教とが相照して、さうして吾々共も佛の境界に一步步々と進んで行くのだといふことを、法華經の壽量品に至つては能く明にして居られるのであります。そこをまだ法華經以前の經では『説きかくす』十分に説いて居られなかつた。

此等の經々に二の失あり。一には行布を存するが故に仍未だ權を開せず。述門の一念三千をかくせり。二には始成を言ふが故に曾て未だ迹を發せず。本門久遠をかくせり。

それだから『此等の經々』即ち法華經以前の色々な經には二つのまだ足りないところがある、失がある。

これもチヨット序でだから申上げたいと思ふのですが、『惡』とか『罪』とか『失』とか、斯ういふ言葉が澤山出て居ります。あれは惡人だ、あれのやることは罪だ、あれのやることは失がある、斯ういふ言葉は始終出て居る。この惡とか罪とか失とかいふ字は、これは皆『足りない』といふ意味です。惡といふのはまだ善くならないもの、罪といふのはまだ人を益することの出來ないもの、失といふのはまだ

完全でないものです。だから彼奴は悪人だと言つても、善人とまるで違ふのではないのです、まだ十分善くないから悪なんです。冷たいといふのはまだ温かくならないものです。低いといふのはまだ高くないといふものとまるで離れたものと考へてはいけないのであつて、その悪の境界から少しづつ／＼進んで行けば善になれるのだし、罪を犯す心持が幾らかづつ變つて行けば世の中を利益する心持になるのであつて、斯ういふやうな言葉は皆要するに「足りない」といふやうな意味に解釋すれば宜い譯でせう。日蓮上人は始終さういふ意味で使つてゐらつしやる。あれは悪人だ、誰は悪人だと言ふけれども、随分善い事をして居る者を日蓮上人は悪人と言つてゐらつしやる。例へば極樂寺の良觀などを悪法師だと言つて居られる、併し極樂寺の良觀だつて可なり善い事をして居るのです、彼は慈善事業などをやつて、病

人を救つたり、親のない兒を養育したり、かなり善い事をして居る。世間から言へば立派な善人です。さういふ立派な人を日蓮上人は悪人だと言はれる。それはつまりまだ／＼足りない、相當に善い事をして居るけれども、苟も佛敎を學んで居る以上は、佛の眞實の敎を學んで、皆を正しい道に導くといふことがこれが佛弟子たる者の當然の責任なんだ。それをいふ加減な敎で以て自ら足れりとして居るといふことは、佛弟子としての責任を完全に果たたものではないのだから、だから彼は悪人だと言はれるのであつて、世間的の意味で言ふ悪といふことは違ふ。罪といふこともその通りであり、失といふこともその通りである。吾々には完全を期すべきものである。今の自分の力ではなか／＼完全に行かないけれども、理想としては完全を期すべきものである。いふ加減のところ、**「モウこれで澤山だ」と思ふべきものではない。**さう考へれば吾々は何時でも悪

人であつて、何時でも罪を犯して居る者であつて、何時でも失を重ねて居る者だと考へなければならぬ。その失を脱れ、罪を離れる爲に、何時でも勉強しなければならぬ、絶えず自ら勵まなければならぬ、斯ういふことになるのであります。その所は大乗の佛敎を學ぶ上に於ては餘程大事な心掛だらうと思ふのであります。そんなことを言つて私自分でも確かな事は出来ませんが、出来ても出来ないでも、完全にならう、今の自分はまだ／＼悪人だ、罪を犯して居る者だ、まだ／＼失の多い者だ、斯う思はなければならぬ。さうでなければ自分が進歩することはない筈です。だからお經に付てもさう言はれるこのお經は詰らないお經だ。詰らないといふのはまるで價値がないのではない。完全な法華經に比べればまだ足りない所がある、斯う言ふので、これは足りない所のあるお經である。これは間違つた經である、間違つたといふのは正しい意味が缺けて居る、

斯ういふやうに言はれるのです。さう考へれば能く解るやうです。
それで**「此等の經々」**華嚴にしても、般若にしても、大日經にしても、さういふものは法華經に比べるとまだ足りない所のあるものである。二つの失がある、第一には行布を存するが故に、未だ權を開せず、蓮門の一念三千だけでも言つて居ない。第二には始成を言ふが故に、曾て未だ迹を發せず、本門久遠をかくして居る。これは二つの點から言つてあります。『行布を存す』といふことは、これは修行をするのに順序があるといふ意味です。行布といふのは『行』は「おこなひ」それから「布」といふのは「ひろがる」といふ意味でありますが、一應言ひますと、修行するには初から偉い者にはなれないぞと、斯ういふことを言ふのであります。それが所謂行布であります。行ひに順序がある、斯ういふ意味であります。しかし順序があるけれども、その一番初の修

行をする時から、モウ最後の佛様の境界に行くまでの道が開けて居るといふことを言ふのが、それが法華經です。東京を出發して行く一歩々々が京都に行くといふ目當を付ければ、その一歩々々が京都に近づく役をして居るのだ。だからその一つ々の行ひを非常に深い價値のあるものと説明するといふことが、それが法華經のこの間申上げた「開顯」といふことです。この開顯の思想といふものは非常に大事である。開とは一つ／＼のことを詳しく調べて、さうしてその調べた結果、その小さい事に深い意味があるといふことを顯す、それが開顯です。それはモウ非常に大事なことである。この間も或る所で下らない例を言つたのですが、一錢の錢といふものは、唯一錢といふと洵に詰らぬ。併し懷ろに六錢あつたのでは電車に乗れないぢやないか、その六錢に一錢足して七錢にすれば電車に乗れる。して見ればこの一錢といふものは非常に尊いものだ。一錢の銅

貨一つを見れば詰らないものだけれども、六錢に一錢を足せば東京の隅から隅まで自由に行ける働きをするのだから、この一錢といふものは決して唯の一錢ではない。吾々が小さい行ひをする、これは小さい、詰らない行ひだと思ふが、その詰らない行ひの積重なることに依つて、自分も佛に成り、世の中を極樂淨土とするやうな大きな働きの何處かに役立つて居るのだ、斯う思へば、その小さい事は決して小さくない。それが開顯です。それを法華經の中では始終言つて居る。法華經の方便品などお讀みになると判りますが、佛様の前でチョット頭を低げて斯ういふ風に挨拶した、それが佛道の本になつて居る。子供が木の葉や草の葉で以て佛様の像をチョット拵へた、それが皆佛になる本になつて居ると言はれるのは皆それでありまして、小さい事だけではいけないが、その小さい事がだん／＼積み重つて行けば大きな結果を生ずるのでありますから、如何なる小さな

い善事と雖も決してこれを輕んじてはならないぞといふのが、開顯の思想であります。それは法華經に來ないといふと十分に現れて居ない。そこを言つて居るのです。「未だ權を開せず」方便の教をスツカリ離れさせない、まだ眞實の事を言つて居らないのだから、色々な經典に説いてある事も尊いけれどもそれを本にして更に法華經の教まで進んで行かなければならぬといふことを言つて居られるのであります。

先づ以上の説明だけでこれは宜しいのであります。所謂「行布」といふこと、修行を積んで行つて段々善くなるといふ、斯ういふことも、私共の自分の日々の修行を勵む参考としては大事なことだと思ひますから、チョットこの本文を離れるやうですが、申して置きたいと思ひます。一體菩薩の行を積むといふ上に於て、細かに分ければどういふ風に分けるか、低い方から段々と高い方に深入りをして行

くといふ、その順序はどういふ風に立てれば宜からうといふことを説かれたものが、所謂菩薩の「十地」といふことであります。これは自分達が修行する上に於て、「今自分はどの邊かな、或はこの邊かな」と、斯う自分を振り返つて見る上に於ては大きな力になるかと思ひますから、一通り申して見たいと思ひます。「十地」といふのは

- 一、歡喜地
- 二、離垢地
- 三、發光地
- 四、焰慧地
- 五、極難勝地
- 六、現前地
- 七、遠行地
- 八、不動地
- 九、善惠地
- 十、法雲地

で、先づ一番初は「歡喜地」です。本當の菩薩行といふものはこゝから始まるのです。歡喜の心持が起らない間は本當の大乗の修行ではないのです。あゝ有難いな、こんなに一切の人を救ふやうになつたらどんなに嬉しいだらう。又さういふことが修行次第では自分でも出来るのかナ、あゝ有難いなアと、眞に喜びの心持を以て修行しようといふこの一念、これがなければ本當の修行ではない。マアそこまで行かない間は、これは研究の爲か、道樂の爲か、何かでやつて居るのでせう。けれども本當にお經を讀んで佛様の大慈悲心が解れば、一番先に感ずることは歡喜といふことでせう。こんなに吾々に大きな望を懸けて、吾々のやうな凡夫だのに、佛様と同じものに成れると思つて下さつたか、さうしてその爲に教をお與へ下さつたか、あゝ有難いな、勿體ないナ、斯ういふ心持が起されれば、その心持の起きた時が歡喜地であります。これは口で言ふのは易しいけれど

のを温かにしようと思つたら、火の上に載せるが一番宜いでせう。熱いものを冷さうと思つたら、氷の上に乗せるが一番宜いのであつて、佛の教を修行すれば喜びを感じられるから、迷ひを離れるといふことが自然に出来る。唯坐つて居つて、「どうして自分は斯んなに懈け者だらうか」「どうして斯んなに慾が深いかなア」と幾ら考へつたつて迷ひを離れることは出来ない。だから歡喜地の次に離垢地といふことがあるのは大變に面白いのであつて、今度は迷ひに心が惹かれぬ、迷ひの境界から離れて段々遠ざかつて行く心持が自然に出来て来る譯です。

さうしますと、今度は第三に「發光地」といふ所に行く。光を發する、光を發するといふのは、總てのものに對する解釋が段々正しくなつて来るのです。光といふのはこれは智の方で、智の光です、智の光が段々出て参ります。智の光といふのは、物の差別的方面を觀る力です。「智慧」と一口に申しま

も、實際やつて見るとなかなか「難しいのです。吾々でもどうかしてお經を讀んで歡喜の心を起すことがあるけれども、時に依ると歡喜どころの騒ぎではない、「あゝモウ面倒臭い、草臥れちやつた、嫌になつたなア」といふやうな氣になる。洵に凡夫でありますから、色々な心持が起きてしまふのです。何時でもこの教を修行する時に、歡喜の心持を持つて居られたら有難いことでありませうが、これはなかなか言ひ易くして行ひ難いことです。併し歡喜の心持を持たない修行といふものは大きな力にならない。

それから第二は「離垢地」です。垢といふのは迷ひです、迷ひを離れる境界。この迷ひを離れるといふのは、佛の大乗の教を修行すれば喜びを感じられるから、そこで迷ひなどに心持が惹かれなくなるのです。唯迷ひだけを無くしようと考へて居てもいけない。幾度も同じやうな譬を言ひますが、冷たいも

すけれども、分けて言へば「智」と「慧」とは違ふのです。「慧」の方のことは後に出て来ますが、先づその「智」の方から行きますと、差別が解る。「これが本當で、これが間違つて居る」「これが上のもの、これが下のものだ」といふ風に、物の辨別と申しますか、ものを見別け、考へ別ける力が出来て参ります。それが發光地で、これは心に迷ひがあるやと出来ないであります。マア吾々は凡夫だから、眼で見ても物の本當の相が見えないのです。耳で聽いても本當の聲が聞えない。自分か何か勝手なことを考へて居ますから……例へば今夜あたり空が曇つて居ますが、今夜若し自分が傘を持つて来て居ると、「これは降りさうだナ、けれども降つたつて傘を持つて居るから構はない」といふ氣になる。ところが傘を持つて居ない人は、「大分空が曇つて来たナ、けれども西の方が明るいから大概大丈夫だらう」と言ふ。空の模様一つでも本當に見別けることが出来

ない。傘を持つて居る人は持つて居るやうな解釋をす
 る。傘を持つて居ない人は持つて居ないやうな解釋
 をする。自分といふ小さいものに執はれて居ると、
 物の本當の相は見えませぬ。ところが迷ひが段々少
 くなるに随つて智慧の力が現れまして、物が本當に
 見えて來、本當にものが聞えて來る、その境界を發
 光地と言ふのであります。孔子が論語の中に「六十
 にして耳順ふ」と言つて居ります、耳順ふといふこ
 とは、人の言ふことがまとも聞えるといふことで
 すが、これは難しい事です。なか／＼まとも聞え
 ないものです、自分の都合の好いやうに聽いてしま
 ふ。自分に都合の悪いことは、聞いても聞かないや
 うな心持になつてしまふ。聖人といはれる孔子でさ
 へも六十で耳順ふといふのだから、吾々では容易で
 はありませんが、併しだん／＼心の迷が離れて參り
 ますれば、發光地といふことになりませう。ものゝ
 本當の相を見別けるところの智慧が光を發して來

る。斯うなつて來る。
 それから第四に行きますと「焔慧地」と申します。
 此の「慧」といふのは、「智」といふ差別を見る方の力
 と丁度一對になつて居るのでありまして、この慧の
 方は物の平等の方面、物の一致する方面を観る力、
 それが慧です。これも亦吾々は考へなければなら
 ぬ。人間はみな一人々々異ふ、異ふが人間として同
 じ性質を持つて居るといふ、その方面を観る、この
 慧の方は平等方面です。平等方面を能く觀る働き、
 それが後から／＼起つて參ります。丁度焔が燃える
 やうに、火が燃上るやうに、平等方面を照す力が段
 段發達して來る。これを焔慧、焔の燃えるやうに慧
 が發達する、斯う申すのであります。この平等方面
 を見るといふことは無論必要であつて、人間は眼の
 前に現れたところで見れば善人もあれば惡人もある
 併し善人でも惡人でも所謂佛性を具へて居るのだか
 ら、修行次第に依つては共に佛に成れるのである。

眼の前に於ては馬鹿も利口もあるけれども、どんな
 馬鹿だつて大いに努力して行けば結局智慧も開けて
 行けるのだし、佛に近くなつて行けるのだといふ、
 この差別の世の中を通して、差別を一貫して存在す
 るところの平等の方面、變らないところの人間の本
 性、世の中の本當の性質を見極めるといふことは非
 常に必要なことである。敵も味方もその通りで、敵
 は憎いけれども、敵が心を離せば自分の味方とな
 るではないか、斯う思はねばならぬ。そこを観るの
 です。眼前の差別の中を通り越して、平等な一つの
 點を捉へるといふ心持、それが焔慧です。慧といふ
 平等方面を観る力が段々盛になつて來る。丁度焔が
 燃えるやうに、斯ういふやうな境界を焔慧地とい
 ふ。これもだん／＼修行して行けばそこまで行くも
 のでありませう。今の吾々共はなか／＼そんな所ま
 で行けばしませんけれども、そこまで行くのであり
 ます。

それから今度は第五に行きますと「極難勝地」であ
 りますが、これはどういふことであるかと言ふと、
 眞俗二諦の圓融を知り得た境界、斯う言はれて居り
 ます。極難勝といふのは、なか／＼この所は越え
 にくい所だといふ意味で、餘程この所は難しい所
 だぞといふので極難勝と言ふ。「眞俗二諦」といふ
 のはどういふことであるかといふと、「眞」といふ
 のは佛様の教でありまして、「俗」といふのは世間
 普通の風俗習慣です。この世間普通の生活と、佛の
 教といふものが、融合つて一つにならなければ何
 にもならない譯です。ところがそこは難しいです。
 佛の教といふものにのみ熱心になると、世間のこと
 は詰らなくなる。それから佛の教を世間に活用しよ
 うといふことになる、いゝ加減に活用するやうに
 なつてしまふ。甚だ悪いことを言ふやうだけれども
 今世の中で佛教が實世間と遠ざかつて居るといふ非
 難があるものだから、その名譽回復のやうな心持で

「ナニ毎日やつて居る事が皆佛教だ」といふやうなことばかり言つて居るけれども、それでは眞の佛教の深味を無くしてしまふ。「色々な事をやつて居ればいいのだ、貧乏人に金をやる、それが佛教だ、道に倒れて居る人を助けてやる、それが佛教だ……」となつてしまふ。それも必要な事ではあるが、佛教にはモット深いものがある。その深いものを取除けてしまつて、世俗の事をやるだけが佛教だといふのでは、佛教が世俗に下つたことであつて、それではいけない。圓融といつて融けて一つにならなければならぬ。佛の尊い教の深いものが實際の生活に活用されて、その實際の生活に活用されたものがモット深味のある佛教に入つて行かなければならぬ。どうちもこれは離れてはいけない。又片方がモウ一方の方に負けてはいけない譯です。そこはなか／＼難しい。だから貧しい者に金を恵むのも、金を恵むといふことは俗語、世間的の事だが、唯金を恵むだけ

ではいけないのであつて、金を恵むことに依つてその人に勇氣を起さして、奮發心を起さして、モット良い本當の生活に入れてやらうといふ慈悲心があつてやるのでなければいけないのです。唯可哀相だから喰はしてやらうといふのでは、それはまだ俗語であつて、眞諦とは一致しない譯です。そこは非常に難しい問題でありまして、佛法を考へて居る時に實世間と離れないやうに、又實世間を考へて居る時には深く佛法と通じ合つて、通ひ合ふことを忘れないやうにといふことを考へますのが、所謂眞俗二諦の圓融といふことであつて、そこがなか／＼難かしい。そこを考へなければ、折角修行したことは實際の役に立つて行かないのであつて、そこを越えることが極難勝地である。これは大變難しいことだが、斯ういふ所を越えて行くやうにといふことを言はれるのであります。どうもそこはドツチかに偏り易いところ

それで今のやうな眞俗二諦の圓融といふことが出まますと、今度は第六番目に行きまして、「現前地」といふことになる。現前地といふのは、佛様とはこんなものだらうといふことがボンヤリ解つて來るのです。第五の極難勝地まではそれが解らない。唯一生懸命にやつて居るけれども、今の實際の生活と佛の教といふものと兩方スツカリ考へて來ると、「ああ佛といふものは斯ういふものか、佛の慈悲といふものは斯ういふものか、佛が世の中に出でられるといふことは、斯くして人を救ひになつたのだ、佛の教が世の中に行はれてこの娑婆世界が寂光土になるといふことは斯ういふものか」まだ自分

「さて佛とは何だ」と考へた時に、「あの、經に斯う書いてあつたナ」といふ文句だけしか頭に浮んで來ないので、佛の境界といふものはなか／＼心に浮んで來ないのであります。段々修行を積んで行けばそれが出來るのでせう。それが現前地です、吾々の境界とは大分遠いから、こんなものでせうといふ説明しか出來ませんが、さうなるのです。今度はそこまで行きますと「遠行地」といふこと

自分佛の境界に行かないが、佛の境界が勢驕として、何となく心に浮んで參る、そこが現前地でありませす。吾々はお經を讀んで、お經の文句としては知つて居る。華嚴經も讀めば般若經も讀んで、佛とはどういふものかナといふ説明は知つて居るけれども

かなか實際は難しい。佛の様子が本當に解つて、初めて本當に迷ひを離れるといふ心持がハッキリ解つて來る。それ迄は何の彼の言つたつて、まだ後へと引戻されて居るのです。慈悲を行ふと言ひながら、誰か禮を言ふだらうと思つて見たり、人を

救はうと言ひながらも、救はれた人から感謝されよ
うと思つて見たりするので。佛の様子が解つて來
て初めて遠く行くといふのは、凡夫の後に引かれる
心持がスツカリ断ち切られるのであります。それが
遠行地であります。これもマアよく考へて見る
と、成程さう行きさうに思はれます。

それからこれよりモツト進みますと、所謂「不動
地」になるのです。不動地といふのは後戻りしない
ことです。不動といふのは動かないといふことで、
後戻りしないことです。吾々は始終後戻りする。時
時は感心な心持も起るけれども、又時々飛んでも
ない心持も起る、グラ／＼して居る。ところが今の
迷ひに戻らない見込が付けば、モウ不動です。これ
からは一步步と佛の境界に進んで行くだけの話で
後に戻るといふことはない。これは八番目で大分佛
に近くなつて居る。そこまで行かなければ本當は不
動ナンといふことは言へない譯です。吾々は信心は

退轉しないと口では言ふけれども、始終退轉して居
る。少し感心な心持が起るかと思ふと、又出鱈目な
心持が起つたり、始終上つたり下つたりして居る。
本當に煩惱を離れる境界になつたならば、それが不
動です。後は佛の境界に近づくのみ、向上の一路あ
るのみ、後戻りする、退歩するといふことはありま
せん。これが不動の境界です。

そこで初めて九番目に「善惠地」です。善とは完
ぜん、モウ申し分のない智慧が具つて參ることであ
ります。善といふのは全といふ字で、完全といふ
意味です。今までのところではまだ智慧が有るとか
ものが解つたと言つても、本當に解りはしないので
すが、モウ元に戻らない、佛の境界に向くばかりだ
といふ境界になれば、モウ智慧は増して行くばかり
です。即ち完全になつて行くのです。まだ本當に完
全ではない、佛に成らない内はまだ完全ではないが
完全になつて行く。自分の智慧が段々進み進んで完

全になつて行く、それが善惠地であります。

さうして一番終に行けば「法雲地」です。自分が
教を説いて、雲が空に一杯に擴がるやうに、自然に
一切の人に利益を與へて行ける。そこはモウ佛と殆
ど同じです。それはモウ自分が完全な勝れた智慧を
具へるやうになれば、一切の人を救ふといふ働きも
出来る譯であります。

これを菩薩の十地と申すのであります。こんな
ことは今この「開目鈔」の本文を読むのに必要はな
いやうなことでありますが、併しイキナリ吾々は佛
に成らうナンといつたつて容易には出来ませんから
マアこんな順序を一通り辨へて置くことも宜いだら
うと思つて、此の機會に先づ一通りを申上げたので
あります。段々さうなつて行く譯でせう。今の私
共は歡喜地までも無論行けはしません。

そこでそれを説き分けるのは、華嚴でも、般若で
も何でも説き分けて居るが、その歡喜を感ずるとい

ム程度の際に、一切衆生を救ふべきところの尊い性
質が既にその時から芽を出して居るのだといふこと
を教へる譯です。これが所謂方便を去つて眞實の教
を求めるといふことです。そこが法華經といふもの
と他のお經との一つの違ひです。初めに、佛の教
が有難いと思ふ時に、その思ふ一念の中に、モウ自
分が佛と同じになつて一切の人を濟ふといふ完全な
行ひをすべき本がそこに出来て居る、根本がそこに
出来て居る、斯う教へるのであります。それが「即
身成佛」といふことです。何も今こゝで私共がヒョ

ツとやつて直ぐ佛に成るのぢやないので、吾々は凡
夫の身を持つて居て、佛の教を學んで、有難いな
と深く思込んだ時に、佛に成る第一歩を踏出して居
るのだ、そこを無駄にしてはいけない、そこを輕々
しく思つてはいけないといふことを教へるのであり
ます。ところが折角一步を踏出して居ながら、途中
で止つてしまつたのでは如何にも残念だから、モツ

トモツト前へ」と自分を進めて行かなければならぬのは謂ふまでもないことであります。

それをこゝで言つて居ります。「行布を存し」その修行のいろ／＼の道筋は説いて呉れるけれども、法華經まで来ないといふと「權を開せず」その方便の教の中に、一切の人間が佛になれるといふ眞實の精神をまだ十分に言つて居ない。だから「一念三千をかくせり」一念といふ吾々の心一つの中に、已を地獄、餓鬼、畜生に墮す心の働きもあるけれども、又自分も菩薩の行を勵み、佛の境界にまで行くその性質もある。この一念の中に三千といふ總てが具つて居るといふことを、法華經まで来ないといふとまだ十分に完全には打明けて居ないといふことを言はれるのです。此の「一念三千」といふとは、屢屢申上げるやうに天台大師が言ひ出したのでありますけれども、併しその精神は法華經の全體に亘つて現れて居ることでありませう。

に出られた佛様で、この佛様は久遠の昔からある本佛の續きだ、斯ういふことです。併しその本佛といふのは、見える部分を除外して言ふのではない、それを含んで言ふのです。これは涯もなく遠くから續いて居るにしても、この世に現れた佛を中に入れて言つて居るので、この世に見えない前にこれだけあるぞといふ、その方だけを言つて居るのではないのです。そこを間違へてはいけません。お釋迦様の働きといふものを除外して、お釋迦様とならない前の佛様だけを言つて居るのではないのであつて、お釋迦様がこの娑婆世界に出て一切の者をお濟ひになつたといふこの働きが、この前の續きだと言つて居るのであつて、これを決して離れて言つて居るのではない。そこが法華經と大日經などの違ひ目なんです。大日經などでも根本の佛様を言ひますけれども、それは娑婆世界に出て教を興へられた佛と離れて言つて居る。この娑婆世界に出て教を興へた佛、

それから二には「始成を言ふが故に」始成といふのは修行をして始めて成佛する、これが始成であります。「始成」といふ言葉は、お釋迦様が六年の間難行苦行をお積みになりまして、その難行苦行をお積みになつた結果成佛、即ち佛の境界に行かれた、斯う見るのであつて、その直接、姿を現した佛様は、本佛といふ宇宙に唯一つきりない佛様の現れたものだといふ、その根本をまだ打明けてない。だから「迹を發せず」本門で言ふところの、毒量品で言ふところの、「久遠」の佛といふものを隠して居る。こゝは能く誤解のあるところですが、

わかり易く申しますと、斯ういふ風に上の方からズツと下まで長い紐が下つて居ると假定させよう。その一部分だけが吾々の眼に見えて居る。その兩端は見えない、が併し長い紐の續きが見えて居るのであります。この見える所がつまりお釋迦様といふ印度

それは洵に小さいものだ、この前の方は大變に大きいものだ、斯う離れて言ふのです。ところが法華經ではさうは言はない、この大きなものゝ續きがこれだ、これを離れて本佛だけ考へることは出来ない。現れたお釋迦様の絶対の慈悲の働きを離れて本佛を考へることは出来はしない、一つの續きだと言ふのです。こゝは餘程大事な點であります。若しこれを離れて言ふことになる、これは一種の哲學みたいになつてしまふ。所謂現象と實在と離れて、現象界のものは假のものだ、實在が本當だ、斯ういふことになる、永遠と現實とが離れてしまふのです。それは哲學としてはさういふ風な考へ方も出来ませうけれども、宗教としてはそれではいけない。宗教はどんなに永遠の佛様であらうとも、その永遠の佛様がこの娑婆世界に出て吾々にいろ／＼の教をお説きになつたといふことが尊いのであつて、現實を離れて永遠ばかり考へることは出来はしない。それなら夢

作佛を説て、爾前二種の失一を脱れたり。

みたいな話になつてしまふ。そこは餘程シツカリ考へなければならぬ。これはマア佛敎ばかりではないので、倫理道德を説いても、宗教を説いても宜いのですが、動もすると現實の世界と離れたところばかりを説いて居るからいけないのであつて、現實ばかりを説いては浅いものになると、言つて現實を離れた本質ばかり説いたら夢物語になつてしまふ。この現實に現れたものを通して、永遠の絶対のものを一つ捉へて行かう、斯う考へなければ本當の信仰といふものにはならない。その所はチョット一步誤ると飛んでもない間違に墮ちて行くのでありますから餘程注意しなければならぬ。それで本門の久遠を隠して居る間は本當ではない、斯ういふのであります。

此等の二つ大法は一代の綱骨、一切經の心髓なり。迹門方便品は一念三千、二乘

その方だけは方便品で済んで居る。

しかりといへどもいまだ發迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波の上に浮ぶるに似たり。

けれども『發迹顯本せざれば』形を現はした佛様が實は本佛といふ永遠の佛様だといふことを、方便品ではまだ言つて居らない。まだ壽量品に行かない間は言つて居ないから、『まことの一念三千もあらはれず』此の一念三千があらはれないといふことは大いに注意すべきことであります。何故吾々が皆佛性を具へて居るか、その問題を解かなければ、その佛性を具へて居るといふことが當にならぬ。『何故佛性を具へて居るだらう』『具へて居ると思へ』……唯思へと言つてもそれは壓制です。實際吾々が

『此等の二の大法は』——二つの大法といふのは、眞實の敎といふことと、それから久遠の佛様がみらつしやるといふ事でありませぬ。この二つのことは、『一代の綱骨』お釋迦様が五十年の一代の間にお説きになりましたその一番大事な點、又その骨髄となつて居るところのものであつて、一切經の中の心髓である。一切經の魂になつて居るものである。併ながらそれは皆法華經に説いてあるのである。しかしながら法華經の『迹門』すなはち、法華經の前の十四品の中心を成して居る『方便品』では『一念三千』即ち吾々が佛に成る性質もあるといふことも言つて居るし、それから『二乗作佛』と言つて、小乗の修行をした者が更に進んで大乘の修行をすれば佛に成れるといふことも言つて居るから、一つの方の失は脱れて居る。即ち『未だ權を聞せず』とあつた

何故佛性を具へて居るのだらう、この問題を考へなければならぬ。又吾々に對してお釋迦様が敎をお説きになるといふ、そのお釋迦様の敎が絶対の敎だと言つたつて、それが何故絶対の敎か。これは方便品の所で、諸佛道を同じうするといふことをお説きになり、お釋迦様を信するのが一切の佛を信することだ。どんなに佛の數が多くても、佛の敎は二種はないといふことを言つてあるのですが、何故二種はないだらうかといふ所まで踏込んで考へなければ判らない。そこが判らなければ、折角一念三千だ、皆佛に成ると言つても、それは何の事だか、まだ納得が行かない譯です。吾々が佛性を具へて居るのは何故だらう。又お釋迦様が世の中に出て敎をお説きになつた、この敎が絶対のものだといふことは何故だらう。それを考へて、本佛といふ一つの大きな力が吾々の佛性にも現れて居れば、お釋迦様といふものにも成つて現れて來るのであつて、現れた方面は違ふ

が、その根本は一つだから、この教と吾々の佛性と
が通ひ合ふのだ、斯う考へなければならぬ。本が一
つだからこれは通ひ合ふ。吾々が本當に信ずるとい
ふ心の本も一つだし、お釋迦様が教をお説きになる
といふその御慈悲の本も一つだから、一つのものが
現れて吾々ともなればお釋迦様ともなつたのだから
吾々の信心とお釋迦様の教といふものが通ひ合つて
一つになる筈ではないか。それは壽量品に來なけれ
ば、根本の佛が一つあるのだといふことを本當に示
しても呉れなければ、この問題の解決は付かないの
です。だから方便品も結構だが、まだ本佛を顯はさ
ない時に於ては本當のところ迄は行かないのだ。或
るところ迄は解つて居るけれども、本當のところ迄
はまだ本當に打明けて居ないのだ、斯ういふことを
言はれて居るのであります。

そこでチョット話が脱線するやうですが、私など
も洵に凡夫ですけれども、しかし此の私にも佛性が
千といふことは解らない。解つたやうだけれども、
本當に解らない。又二乗作佛といふことも定まらな
い。そこまで行つて、總ての骨折が皆自分を佛にす
る事に役に立つのだといふことが眞に解るのであ
る。だから壽量品を見ない間は、水の中の月を見る
が如くにして、月の本體は判らない。根なし草の水
に浮んで居るやうなものである。

本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教
の果をやぶる。四教の果をやぶれば四教
の因やぶれぬ。爾前・迹門の十界の因果
を打やぶりて、本門の十界の因果をとき
顯す。此即本因本果の法門なり。

ところが本門に至つて始成正覺といふことがスツ
カリ破れる。修行して始めて覺を聞いたのではな
い。成程修行といふことは覺の端緒だけれども、覺
り得る本性は皆人間に具つて居るのだといふことが

具つて居て、私もこの佛様の教を信ずることに依つ
て佛様と通ひ合つて一つになるのだとすると、何處
かそこらにまだ佛の教を聴かない者も澤山に居る、
其者だつてやはりこの佛様の根本のものは永遠に
縁が離れて居るのではないので、まだ聴かないだけ
の話なのだから、これを馬鹿にしたり、これを疎ん
じたりする氣にはならない譯です。これも一つ引張
つて一緒に善くしてやらうぢやないか。縁が有つて
この佛の教を聴きさへすれば、今は凡夫だけれども
今は惡人だけれども、今は馬鹿だけれども、兎に角
やはり同じに救はれるのではないか、斯ういふ心持
が起る筈であります。その慈悲心があつて、初めて
吾々は佛の教を學んだといふ甲斐があるのでありま
せう。そのところはどうしても甲斐があるのでありま
せう。唯一絶對の佛といふ所まで來ないと本當に解り
ませぬから、そこで『發迹顯本せざれば』壽量品に
あるやうな本佛まで來ないといふと、本當に一念三

解る。さうすると四教の果を破る。『四教』といふ
のは前に申した藏教、通教、別教、圓教といふので
あつて、小乗の教から大乘の教までであります。が、
その大乘の教を聴いて始めて覺つたのだといふ考
が破れる。始めて覺つたのぢやない。教を聴かな
ければ覺れないけれども、教を聴かない前から、聴け
ば覺れる本性はあつたのだといふことを説くのであ
りますから、聴いて初めて覺つたのだといふその考
は打破られる。破るといふことは、まるで役に立た
ぬといふぢやない、それではまだ足らぬといふこ
とに氣が付くのであります。

『四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ』これは
どうも甚だ難しいことですが、四教の因やぶれぬ
因といふことは自分の修行であつて、果といふのは
所謂覺つたことです。この覺つたのは教を聴いて始
めて覺つたのぢやなくて、教を聴かない前から覺り
得る本性を持つて居るのだといふことが、所謂『果

をやぶる」といふことです。それから進んで言ふと、修行して修行だけで覺つたのぢやなくて、修行する本性が自分に具つて居るから修行が出来たのだといふことになる、それが「因やぶる」といふことです。だから吾々は佛様に對して感謝するばかりでなしに、自分が佛様の教の解るやうな本性を持つて居ることに對して感謝しなければならぬ。それが本當の有難いといふことです。本當に有難い、自分が一人で修行して居ると思つてはいけない、自分が修行するやうな本性を具へて居るといふことが有難い。人間としてさういふ本性を具へて生れ來つたといふことが有難い、それが因やぶるといふことです。自分が修行したのだと思つてはいけない修行する本性をどうして持つて居るのだ、根本の一つの大きな佛様があつて、その力に護られて吾々は生きて居るから、修行するやうな本性を持つて居るのぢやないか、斯う考へると、自分の力だけぢやない、こ

の所謂「本佛」根本の佛様の大きな力の中に含まれて皆が生きて居るのだといふ、その根本のものに對して心から感謝する、本當に有難いといふ心持が起さる譯であります。そこで四教の果だけでは足りない。四教の因、修行だけでもまだ足りない。修行するやうな本性が元からあるといふ、そこで過つて能く考へなければならぬといふことになる譯であります。なか／＼そのところは宗教的に面倒なところでありますが、そこまで深入りして來ないと宗教生活の根本が解りません。

それで「爾前・遮門の十界の因果をやぶる」法華經以前、或は法華經の方便品までのところでは、自分が修行して、自分が教を學んで覺つたといふ、因果の關係だけを説いて居るけれども、その修行をする力の根本であるところの本佛といふものが説かれて居ないから、そこで本門になつて來ると、遮門の十界の因果を打やぶつて、本門の十界の因果を説き

顯すのである。この「本因本果」、即ち吾々が修行して吾々が覺るといふその根本は、本佛といふ唯一つの絶対の佛の力の現れたものだといふのであります。

九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備て、眞の十界互具・百界千如。
一念三千なるべし。

このところまで考へて來るといふと、地獄・餓鬼・畜生、それから脩羅・人・天といふやうな佛以外の九つの世界のものも、この根本の佛様の力の中に含まれることになるし、又佛と成るべきその本性も、地獄・餓鬼・畜生・阿脩羅といふやうな九つの世界の内に居る銘々の心具つて居るといふことになつて來る。そこに至つて初めて本當の絶対の理と申しますか、絶対の眞理といふものゝ尊さが解つて來る。それが「十界互具」といふことであり、「百

界千如」といふことであり、「一念三千」といふことである。この一念三千といふことは前に申したことでありますから、こゝでは略しますが、要するに唯一つのものである。一つのことしかないので、本佛といふもの以外に何もあはしない。本當を言へば一つしかない、その一つのものゝ中に皆含まれて居る。その一つのものを吾々は氣が付かないで居るから、あんなことをやつたり、こんなことをやつたりして居るのだ。併し氣が付いたといつたつて、氣が付いただけではいけないのであつて、その氣の付くといふ働きの中から、自分をこの根本のものに一致せしむべく努力しなければならぬ、斯ういふことになつて來る。その努力する力がどうしてあるか、やはり根本の佛があるからだといふことになる。ですから何時でも吾々の信仰生活といふものは、自分が骨折らなければならぬぞといふことを忘れてはいけないのですが、併し骨折ることの出来るのは

根本の佛様があるからで、自分の力だけではないぞといふやうに、又元に戻るのです。これは兩方缺けとはいけない。それを「一つの佛様を頼みさへすれば、骨折らないで坐つて居ても救はれる」といふのは間違つた考であるし、「又俺が骨折つて俺が佛に成るのだ」と思ふのもいけないのであつて、自分が骨折らなければならぬのだが、骨折れるやうに生れたのは何故だらう。根本の一つの佛様があるからそのお蔭で骨折りが得るやうに生れたんだといふことを考へる。さうすると自分の責任が大きいことを考へると共に、この骨を折り得る有難さを感じるといふことになつて行くのであります。それだから他力にも偏らず、自力にも偏らずといふことを始終言はれるのはそこであります。他力に偏りますといふとツイ解けて「斯うやつてデツとして居て何とかして貰ひたい」といふやうな氣になる。又自力に偏りますと「ナイニ俺が一人で覺るのだ、佛も經もあるも

のか」といふことになり易いのであります。佛の教はさうではないのであつて、その根本に於て自他を全く融合して、結局大きな教といふものになる譯であります。どうもそのところはなかく捉へにくいところでありまして、自分の事を申して甚だ失禮であります。私などは西洋の哲學をやつて、それから佛教が面白くなつて入つて來たものです。それから、角兎「ナイニ俺の力で覺れる……」といふ氣になり易い。口ではこんなことを言つて居りますが、腹の中では何とか自分でやればやれるといふやうな氣がする。それは悪い事なのです。まあさういふ氣がするのはどうしてするかと言へば、大きな力が現れてそんな氣がするのであります。それから、能く考へれば有難い譯であります。マア吾々は理窟の方から行きますから、兎角に有難いといふ氣が起りにくい。解つては居ります。解つては居るけれども、解りながら大して有難くないやうな氣分が時々出て來

る。これは自分達が理窟から入つた一つの弊害であらうと思つて居りますが、宗教としては只今申上げたやうに、自分といふものに執はれてはいかず、又他の力に執はれてはいかぬといふ、自他融合した一つのところに安心を求め、又そこに何時でも喜びの心持、感謝の心持を持たなければならぬものだらうと思ひます。まだ吾々は本當の有難いところまで行つて居りませんから、口ではこんなことを言つて居ても、時々間違つた料簡も起きるのであります。やはり御書に基いて見ますと、斯様な意味になるやうであります。

(第十三講了)

X
X
X
X
X

一友問ふ。書を読みて記し得ざるは如何。

先生曰く、只曉り得んことを要す。如何ぞ記し得るを要せん。曉り得んことを要するは已に是れ第二義に落ち了る。只自家の本躰を明かにし得んことを要す。若し徒らに記し得んことを要せば便ち曉り得ず。若し徒らに曉り得んことを要せば、便ち自家的本躰を明かにし得ず。

——王陽明傳習錄——

理想的文化と法華經

磯部 満 事

四八

法華經に云く、我不愛身命但惜無上道云云。涅槃經に云く、寧喪身命終不誑王所說言教等云云。
章安大師云く、寧喪身命不誑教とは身は軽く、法は重し、身を死して法を弘む等云云。

——日蓮聖人法蓮鈔——

「小さい幸は小善より起り、大なる幸は大福より起る」と、日蓮聖人は喝破された。今や起たざるを得ずして猛然奮ひ起つた皇軍は、宛かも輪實の轉ずるやうに、風の草を靡かすやうに一切障礙なく、既に北支の天地には、當に理想の樂土が建設されんとしてゐることは、神人の俱に大なる歡とする所である。滿洲といひ、北支といひそこに理想的文化を以

て彼等を指導啓發し、漸次西天に及ぶことは、我が建國の理想實現とはいへ、人類の最大なる福音であらねばならぬ。而かも支那人にしても、白人にしても、かゝる遠大高尚な理想は極めて彼等の領解し難い處と思ふ。即ち彼等の民族性と、我大和民族性とはあまりに距離があるのである。數年前、ある名士が、日米の國交上若干不快の事件が起つた時、若

し日米戦は、英國は日本と締盟の關係上必ず我國に加擔するものと斷定され、いくら彼等の人種觀念や功利主義を話しても、英人は紳士だからと信用されて居る程、日本人としては互の心理状態から推して、彼等を取扱はんとするそこに意外とされるやうな結果を見るのである。

由來支那人と英米人とは、甚だ近似の性情を示してゐる。それは利財の問題となれば、親子もない、夫婦もない、朝の親友は夕の仇敵となる、獨り猶太人のみが金に汚いばかりではない。この事は金錢に清廉な日本人の眼からは、全く淺ましい行跡としか思へない。英國が支那の爲めに援助してゐるのではなくして、自國の權益擁護の爲め、打算的に行動して居るものと思はれる。從來我欲の爪牙を伸べてゐた彼等に於て、一朝支那が民族的に覺醒して、正義日本の指導に依り開拓されて行けば、自ら手を引かざるを得なくなる、支那から離れたのを見れば、印

度も今のまゝでは治らぬ。さうなれば大變であるから、今や斷末魔の苦悶で何をやるか知れたものでない。かの英國が、その國旗に日没なしと誇つて居ることは、一面から見れば、全く惡棘振りを臆面もなく告白してゐるやうなものなのである。印度の志士等が何故に憤慨してゐるか、香港がどうして彼の支配下にあるか等を知る時に、又北米合衆國が、加洲をどうして得たか、パナマはどうだ、布哇はどうしたと審判された時、それが博愛を標榜し、人道だとか平和愛好といふ口先と肚の中との差があまりに激しい違ひに吾等は觀感し、顔むけなるまいと思ふが彼等は鐵面皮である。昨日いつた言葉でも、今日不利益なれば知らぬ、言はぬと平氣でいふ程厚顔無恥なのである。内地の日本人は、白人は正直だ、電話一つで取引きが出来ると信用されるが、お互に儲かる時はよいけれども、一朝大きな問題となれば、本音を出すのである。個人と國家の行動は異ふのであ

る。従つて先頃我空軍が、徳義上南京の空爆に際して豫告を與へた事にも、彼等にはさう響かない、立退を要求するそんな権利はあるかといふやうな、すぐに権利義務を振り廻して、徳義上とか、我武士道等といふものは、彼等に於てさう簡単に會得出来ない習性なのである。空爆を非人道的といふ彼等が一千九百二十二年、オランダ・ヘーグに於ける空戦法會議に、我國では、空爆の目的物を具體的に制限すべき事を主張したるにも不拘、英佛は之に反對をして、敵國の軍用目的物と認めらるべき物は、悉く空爆の目標であると主張したり、かの世界大戦に於て最初に空爆を敢行したのは、實に獨乙でなく佛國であつた。そんな事は棚にあげて今更差出ケ同しい事を持ち出すことも要するに自己の打算的に基くからで、他は推して知るべしである。

日本の知名の士が、歐米を歴訪されても、表玄關からばかり行かれたのでは、真相は判るものでない

民族である。かゝる人種がないならば、それこそ世界は眞の脩羅場と化して弱肉強食、地獄の相そのままであらう。我日本が神國の所以も、その使命の重大な事も、靜かに世界の動きを眺めた時に、各自首肯せらるゝであらう。

肇國以來、歷朝民心の薰化に、畏くも大御心をそそがせ給ふて、智徳の並進、道徳の尊重が、この類なき崇高な人格の國民として一大家族をなしてゐることであらう。かの秦の始皇帝が、萬里の長城を築いて、焚書抗儒の擧に出で、僅かに四十五年を以て滅んだのと、我が京都の皇居が、何等の城壁らしきものさへなく、市中にあつて而かも彌茶へましたこととは、天地の距を感ずる。

そこでかゝる大衆對手に理想的文化を隣國に敷かうとするには、極めて難事業である、けれども道をしてせば化導出来る筈なのである。先づ儒教を復活せしめて天道明德仁義忠孝の倫常を尊ばしめ、更に

國でも家でも、玄關よりは、臺所や居間を見て始めてその人の平素の様子が知られるやうに、裏には裏があつて彼等の一般民衆は極めて非常識なものである。早い話が、紳士顔してゐても、日本にもこんな電車はあるかとか、こんな建物はないかといふ程度なので、自分の名前さへ書けぬ者が多いのである。而して宗教家に於ても偽善者が實に多い日本にも大僧正で相場をする人もあるが、彼等宣教師で悖徳行爲を致すものも屢々ある。今更カンタベリ大僧正の反日運動敢て怪しむに足りない。警戒すべきはある魔手、即ち黄金の力に依つて世界を征服せんとする鬼畜である。かゝる精神的に慄涼たる悲惨な世界の現狀に、獨り道義を以て建つ我國の崇高な文化を歎美せずに居れない。各國悉く物欲の爲め手段さへ擇ばない暴狀の中に、嚴然として貧乏な小さい國に於て、歡悦に満された生活を營んでゐる我國民こそ寧ろ不思議の存在といへる、世界無二の

加ふるに佛教の深遠な哲理と、微妙な信仰を鼓吹しそこに調節せる菩薩行を實踐せしめねばなるまい。單的に申すならば、聖日蓮を通した法華を信奉せしむる處に一切の解決は與へられるといふことなのである。人生は極めて複雑である、理窟通りにはゆかない、二と二と合せても必ず四となる事もあれば、三となつたり、五となることもあるのが人生なんで正直に働きながら不遇にあつたり、衛生に注意して居ても病氣になることもある。楽しい人生の半面に又苦しい人生もある。怒ることは儒教では徹底されない、殊に生れた以上、死の問題もある、死後の解決が明瞭でない、人は思ひ切た幸福安住生活は營されない。今度の事變に於ても、最初は軍隊に僧侶のゾロゾロした法衣姿では邪魔になつて困ると敬遠されてゐたさうだが、一度戦死者の出來た時に、それを善處するは坊さんならではといふことで、彌々戦争に僧侶は必需だといふことにされてゐる如く、人間

本然の發動として宗教的の要求を持つものなんである。信仰を無視する人は、過去の罪業の致す所であつて、眞の幸福は味ひ得ないで終るでせう。本心の醒悟せない爲めに、夢中で人生を送つてゐることになるから、物の眞相を見ない。その喜びも眞の喜びでなく、その幸福も假りの一時的のものに過ぎない。どうして大きな理想の實現が期待されやう。先頃もある人が、經濟生活の範を禪僧の食事に眞似んとせられた。此は結構に思ふが、嘗にその型の上ばかりに執はれないで、その精神に學ぶ所がなかつたならば、結局は失敗でないかと思ふ。粗衣粗食の中に健康を保持してゐることは、根本に精神上の満足があるからである。心の自覺なしに粟や稗を與へても、寧ろこれは喰べないであらう。ある醫學博士が毎朝一回野菜食のみで過され、日本人全部がこの通りせば食料問題解決だとされても、それは各自に精神的自覺なく、形の上から強制すれば結局は失敗であ

る。かの北米の禁酒運動に於ても、精神的に啓發せないから遂に目的が達せられず、却て幾多の犯罪を醸成したのである。畢竟根本は人心の覺醒にある。この根本の點に着眼しないで、當面の施設にのみ力を注いで居ても、時と共に變遷するものなんである。そこに根本的の文化としては永遠不變の眞理の基礎の上に立てられたものでなければならぬ。換言せばこの天地宇宙觀に於ても、吾等人身觀に於ても、又超人觀に於ても、人文の進歩に超然と卓越した明教を以てされなければならぬ。

かゝる完全なる理想的の本質を有せる宗教が、世界に見出されるであらうか、或るものは超人觀即ち佛神の釋明なく、各自の想像神に任せ、ある者は哲理に悖る捏造佛を念じ、或るものは無佛無神を論じ、或は偉人聖賢を祭祀する等、極めて雜然たる宗教界に燦然として光を放ち、統一神を顯示せるものは法華經以外にないのである。

人間の問題に對しても、人の性は善だとか惡だとか諍つたり、神の子だ罪の子だと水かけ論をして敵視するが、法華經に於て開顯統一の教を説き、人身の極致を事實に示されて居る。日蓮聖人、立正安國論に「法師は詭曲にして人倫を迷惑し、王臣は不覺にして邪正を辨ずることなし」と痛嘆され、「弟子

等專政の軍閥功利專横の手より遁れんとし、新たに樂土を出現せんとするに際し、吾人は特に永遠の教化樹立に對する上下の檢討を熱望するものである。日蓮聖人、弘安三年末五十九歳の諫曉八幡抄に曰く、

一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て、心情の哀惜を起さざらんや」と悲憤の涙を灑がれたのは何の爲めであつたか。大聖人は單に個人の解脱救済ばかりが佛教の精神ではない、釋尊の明教は、世界に一大理想文化建設と我等永遠の生命救済とにある。全世界をあげて徹底的に光あらしめ慶を與へんとして遣されたのが、法華經であると證得され、それが又我日本の建國事實を哲理付けるものとして王佛冥合に涙滿の如く下ると歡ばれ、知法思國、立正安國の爲めに殉ぜられたのではないか。今や支那、遼遼の地、未だ玉澤に雷はずして、彼

佛(釋尊)出現し給ひて佛教と申す藥を天と人と神とにあたへ給ひしかば、燈に油をそへ、老人に杖をあたへたるが如く、天神等還つて威光をまし勢力を増長せし事成劫の如し。佛經に又五味のあぢわひ分れたり、(佛)在世の衆生は成劫程こそなかりしかども、果報いたう衰へぬ衆生なれば、五味の中に何の味をなめても威光勢力をままし候き。佛滅度の後、正像二千年過ぎて末法になりぬれば本の天も神も阿脩羅大龍等も年もかさなりて身もつかれ心もよはくなり、又今生まれ來る天人脩羅等は、或は小果報、或は惡天人等なり。小乘・權大乘等の乳・酪・生蘇・熟蘇味を服せしむるは、老

人に麤食を與へ高人に麥飯等を奉るが如し。而るを當世此を辨へざる學人等古にならいて、日本國の一切の諸神等の御前にして阿含經・方等・般若・華嚴・大日經等を法樂し、俱舍・成實・律・法相・三

論・華嚴・淨土・禪等の僧を護持の僧とし給へるは、唯老人に麤食を與へ小兒に強き飯をよくめるが如し。云云

日蓮 觀心本尊鈔講義

講師、小林一郎先生

日時、每週火曜日午後七時—八時三十分

場所、統一會館講堂

舉國精神總動員の秋に臨み、歡んで困苦忍難の分度生活を實現せんとするには、根本に正しい宗教の信念が與へられねばならぬ。爰に本講座の開始は、時局に對して教化運動の第一義であることを誇る、盡忠報國の士女奮つて來聽、道念の喚發を期せられよ。

時事所感

金子光和

(一) 何爲民國失時平。欲拂妖氛提劍起。

暴戾欺人屢負盟。皇軍第一右燕京。

(二) 蘇聯魔手冒東洋。一擊只應期殄滅。

四百餘州橫虎狼。東洋鎮綏是吾皇。

(三) 英蘇傀儡荐縱橫。百戰忽能挫強敵。

早不磨懲奈八紘。皇軍到處旭旗明。

(四) 底事中華抗日類。廟謨一決天兵下。

誰揮劍戟救斯民。赫赫威風壓四隣。

記事

本部 團報

御會式 十月十日の日曜日を卜して、午後二時より大聖人の第六百五十六年を總ぶべく清集を催した。方今未曾有の事變に際會して一層日蓮聖人の大主義を拜し感懐に堪えない。而してこの事變が一面思想上に於て、他面經濟に於て重大の關聯あることを思ひ、我國の經濟の動きに就ても理論でなく、空論でなく實際上に果して如何なる動向を辿りつゝあり又將來にどうなるかの國民として辨へておればならぬ重要な點を聽きたいものとの申出での人も尠なくなつたので、新界の樓成上田理事長を煩はして、小西日喜郎師の法要を慶修後、約二時間厚々と體驗上事實の諸點に觸れた極めて意味深長の説を聽くことを得、續いて和賀義見師は『事變に際して日蓮聖人を憶ふ』と題して熱辯を振ひ、一同をして興起せしめられ、定期五時より夏谷江南先生の健康書道法に就ての演説と共に書道十箇の秘訣を送べ、猶ほ質疑應答もあつて點燈の頃一同名残り惜しく散會した。

御書講座 日蓮聖人三大部の一である開目鈔の講話が、昨夏より小林一郎先生に依つて毎週一回連続講座が開かれて居たが、十月十二日第四十八講を以て完結したので、更に十九日の火曜日より觀心本尊鈔が講義されるゝ事となつた。今や國民精神總動員の秋、各方面に於て各様の計劃が進められて居るが、而かも之を實行する力は、矢張り信仰に醒めた時に喜んで實際化するに到るであらう。然るに何を信仰の對象となすか、最大重要事に關する、正信は個人に於ては永遠の向上となり、社會國家にあつては理想文化の建設となるが迷信はこの反對で、社會を善し、國家を滅ぼし、自ら無間の獄に墮ちて出づる期はない。此度此講座を開かれた事は極めて重大なる意義を有つものであると思ふ。

日曜講集 毎日曜日には午後二時より四時半乃至五時まで、勤行と法話の會が営まれて居る。研究的に求道の士女は多いが、素直に御實前に合掌拜跪して、唱題修行する人は割合に尠ないものであるが、研鑽することは信心への程道であつて、信こそ第一義であること

竹内、米山氏等に代つて其の知法院精進日蓮居士の戒名そのまゝなる努力振りを歎徳し、田中道福氏は、總引氏と縁故深い法友の一人なるを以て、その諱により氏の純信護法の誠意を披瀝し、爰に村田師は各遺族の代表として感謝の挨拶を送られ、最後に小西日喜郎の閉會辭を以て結ばれた。

故人を憶ぶ志篤き人々が市の内外を問はず遠く横浜からも、更に遠く東海道濱松からも上京せられた方もあつて、五時閉會後も三五五懷舊談に時餘を費した。そして些かな御供養を來會者一同へ差上げ得たことを共に歡ぶものである。猶御供へのものは適當に御遺族へ贈ることを御諒承願ひます。

型日村田師から左記の來狀に接し乍略儀附記して御來會の各位、特に御配座を煩はした方々に御高覽願ひたい。

拜啓 昨日は故師範第三周忌に付御多用中種々御高配を辱ふし御鄭重なる追悼會を御開催下さいましたことを遺族に代り厚く御禮申上ます。

當日御多列御焼香下さいました方々に對しても何卒宜敷御傳へ下さいませうお願ひ致します。

を履き違へぬ様にしたいものである。教化團體代表大會 十月十四、五の兩日は、全國の教化團體代表大會を明治神宮外苑の青年會館に開催せられ、會するもの無慮五百六十餘名、本團より磯部常任理事出席、午前九時開會式あり、十時より會議に入つた。主なる議案は『國民精神總動員に關し教化團體として採るべき方策如何』といふにあつて、次の決議を見た。

國民精神總動員に關しては、昭和十二年九月九日の内閣告諭及義に政府より提示せられたる本運動實施要綱に遵ひ、官公私關係諸機關と緊密なる聯繫のもとに、協働之に當り其の成果の完きを期せざるべからずと雖も、就中教化團體關係者にありては、其の本來の使命に基き精神の大道に則り敬虔なる信念を以て、躬行示範特に時局に對する明確なる認識に立脚して、左記諸方策の徹底的實行を要するものと認む。

左記の方策といふは、國體觀念と、日常生活に於ける盡忠報國の實踐が主なるものとなつてゐる。他の細目は省略する。

本團は事變の勃發と共に、直ちに教化運動の第一陣として多くの者が暑中で休會せるにも

抱らず、既報の如き特別大講演會を開催した。以來各方面に於て到る處此種の會合が開かれて來た。そこで本團に於ては更に進んで、永遠の教化に邁進すべく幹部會の意見が一致してゐる。各團員におかせられても一層の御精進を祈る次第である。

追悼會 十月は故親木顯正師の祥月に相當する。本年は早くも第三周忌に付、廿四日の日曜日午後一時三十分より本團に於て、師の三周忌と、齋藤一郎氏の第四周忌並に本團維持員總引弘氏の百ヶ日忌を併せ營ませて戴いた。小西、和賀、山口等の講師中心となつて時節柄しめやかな法筵が張られた。親木未亡人は宛里福井へ御歸還になつてゐるので御案内を御遠慮し、墓張在寺の遺子弘子權九歳を村田道弟が扶持して参列され、齋藤未亡人も二愛兒と御近親打揃つて御焼香され、感懷賞に無量であつた。

法要後、河合勝明氏の『國寶論』と題し、特別講演として三氏の法語を讀へた法話を致し續いて岩野直英少將の親木師追慕の至情を吐露し、萬障を排除してこの法味を回向せんが爲めに來會せる旨を送べ、和賀謙介氏は齋藤氏と最も親交を續けられて居た關係上、上田、

竹内、米山氏等に代つて其の知法院精進日蓮居士の戒名そのまゝなる努力振りを歎徳し、田中道福氏は、總引氏と縁故深い法友の一人なるを以て、その諱により氏の純信護法の誠意を披瀝し、爰に村田師は各遺族の代表として感謝の挨拶を送られ、最後に小西日喜郎の閉會辭を以て結ばれた。

故人を憶ぶ志篤き人々が市の内外を問はず遠く横浜からも、更に遠く東海道濱松からも上京せられた方もあつて、五時閉會後も三五五懷舊談に時餘を費した。そして些かな御供養を來會者一同へ差上げ得たことを共に歡ぶものである。猶御供へのものは適當に御遺族へ贈ることを御諒承願ひます。

型日村田師から左記の來狀に接し乍略儀附記して御來會の各位、特に御配座を煩はした方々に御高覽願ひたい。

拜啓 昨日は故師範第三周忌に付御多用中種々御高配を辱ふし御鄭重なる追悼會を御開催下さいましたことを遺族に代り厚く御禮申上ます。

當日御多列御焼香下さいました方々に對しても何卒宜敷御傳へ下さいませうお願ひ致します。

尙遺兒弘子に對して特に御配座を受けました方々に對して一々御禮狀等も差上ぐべきではございますがそれも餘り事々しくなることかと存せられますので、甚だ乍失禮御來館の折よろしくお傳へ下さいませお願ひ致します。

右不取敢寸緒を以て乍失禮御願迄 教具

梶木、齋藤、總引三氏の追悼會に
本郷 日常誌

梶木師に
爲す事の多くをあたらし人の世に
残して逝きし師こそ惜しけれ。

齋藤氏に
法の身は雲の彼方に今も尙ほ
知法恩國の叫び響ぐらん。

總引氏に
若き身を病の床にとらわれて
去りにし君の姿憶はる。

南無妙法蓮華經

團費誌料寄附及維持費領收

(自八月二十一日
至十月二十日)

一金 五圓也	静岡縣 福岡 駒井殿	一金 貳圓五拾錢也	同	高橋順一郎殿	一金 貳圓也	千葉縣 關口 誠殿
一金 貳圓貳拾錢也	鎌倉 大菅己三男殿	一金 貳圓貳拾錢也	同	杉浦 サダ殿	一金 貳圓也	千葉縣 關口 誠殿
一金 壹圓貳拾錢也	山口縣 小野ツネコ殿	一金 五圓也	同	山口縣 野上 重造殿	一金 五圓也	東京 齊藤 リイ殿
一金 貳圓貳拾錢也	萩 増野 純亮殿	一金 壹圓八拾錢也	同	山口縣 野上 重造殿	一金 拾圓也	名古屋 小菅 三郎殿
一金 壹圓貳拾錢也	東京 大谷權次郎殿	一金 參圓也	同	山口縣 野上 重造殿	同	沼部彌太郎殿
一金 貳圓貳拾錢也	群馬縣 増田清三郎殿	一金 五圓也	同	千葉 片岡 別莊殿	同	
一金 貳圓貳拾錢也	福井縣 宮川 日見殿	一金 貳圓五拾錢也	同			
一金 五圓也	兵庫縣 笹井 つた殿	一金 貳圓貳拾錢也	同			
一金 五圓也	東京 寺澤 萬三殿	一金 貳圓五拾錢也	同			
一金 貳圓四拾錢也	名古屋 坂野 千代殿	一金 貳圓貳拾錢也	同			
一金 參圓也	山口縣 青木 ツル殿	一金 五圓也	同			
一金 參圓也	東京 伊藤 わか殿	一金 貳圓五拾錢也	同			
一金 參圓也	同 宇野 博順殿	一金 貳圓五拾錢也	同			

右雜有人帳仕候也

財團法人統一團會計

今回御送金に御便宜の爲め、送料は本團持ちの用紙を未持込の方に添付して置きますから宜敷願ひます。猶御不用の時にも捨てない様特にお願致します。

説き、正法を修行し、世の法王と爲り、法を以て世を治めむ。

世尊、若し人王有つて、自護し及び王の國土多く安樂を受くることを得んと欲せば、國土の一切衆生をして悉く皆快樂を成就し、具足せしめんと欲せよ。一切の外敵を摧伏することを得んと欲し、一切の國土を擁護することを得んと欲せば、正法を以て正しく國土を治めんと欲し、衆生の怖畏を除滅することを得んと欲せよ。世尊、是の人王等は、應當に必定是の經典を聽き、及び是の經典を讀誦し、受持する者を恭敬し供養せん。我等四王及び無量の鬼神は、是の法食善根の因縁を以て、甘露無上の法味を服することを得、身力を増長し、心進勇銳して諸天を増益せん。

爾の時に、四天王、即ち座より起つて偏へに右肩を祖にし、右膝を地に著け、長跪合掌し世尊の前に於て偈を以て讚めて曰さく、

佛月は清淨にして

満足莊嚴す

佛日は暉曜として

千光明を放つ。

功德無量にして

猶ほ大海の如し

智淵無邊にして

法水具足す。

佛の眞法身は

猶ほ虚空の如し

物に應じて形を現すること

水中の月の如く

障礙有ること無し

筏の如く化の如し

是の故に我れ今

佛月に稽首したてまつる。

爾の時に、世尊、偈を以て答へて曰く、

此の金光明は

諸經の王なり

甚深最勝にして

上あること無しと爲す

十力世尊の

宣説する所

汝等四王

應當に勤護すべし。

閻浮提の内

諸の人王等

心に慈愍を生じ

正法を以て世を治むるに

若し能く此の

妙經典流布せば

則ち其の土をして

安穩豊熟ならしめん。

大辯天神品第七

功德天品第八

堅牢地神品第九

散脂鬼神品第十

正論品第十一

何等をか名けて治世の正論と爲す。地神、爾の時に 力尊相王、信相太子の爲めに、是の偈を説いて言く、

我れ今當に

諸王の正論を説いて

衆生を利せんが爲めに

諸の疑惑を斷ずべし

一切の人王

諸天の天王

應當に歡喜し

合掌し諦聽すべし

諸王は和合して

金剛山に集まり

護世の四鎮は

大師梵尊は

能く疑惑を除く

云何ぞ是の人

云何ぞ人王にして

生て人中に在りて

正法をもて世を治む

護世の四王

時に梵尊の師

汝今此の義を以て

我れ要す當に

第一の勝論を

業を集むるに因るが故に

王として國土を領す

起つて梵王に問ふ

天中に自在にして

當に我が爲めに斷ずべし

名けて天と爲すことを得

復た天子と名づく

王の宮殿に處し

而も名けて天と爲す

是の事を問ひ已る

即ち偈を説いて言く

我に問ふと雖も

一切衆生の爲めに

敷揚し宣暢すべし

人中に生じ

故に人王と稱す

胎中に處在するに

或は先に守護して

人中に在り生れて

天の護るを以ての故に

三十三天

是の人に分與す

神力の加する所なり

惡法を遠離し

善法に安住し

能く衆生をして

半人王と名づけ

若し惡事有るも

其の罪を治せず

善法を捨遠せば

諸天守護す

然して後に胎に入る

人王と爲ると雖も

復た天子と稱す

各己が徳を以て

故に天子と稱す

故に自在を得

遮て起らざらしむ

修して増廣ならしめ

多く天上に生ぜしむ

亦た執樂と名づく。

縦して問はず

正教を以てせずして

惡趣を増長す

故に國中に
三十三天
其の國王
國の正法を壞し
他方の怨敵
自家所有の
諸の惡盜賊
法の如く世を治むれば
若し是を行ぜば
譬へば狂象の
暴風卒（トウフウ）に起りて
惡星數出でて
五穀果實
王の正を捨つるに由りて

諸の姦闘を多からしむ
各願恨を生ず
惡を縱して治せざるに由り
姦詐熾盛にして
競ひ來りて侵掠す
錢財珍寶は
共に來りて劫奪す
是の事行はれず
其國殄滅せん
蓮華池を蹋むが如し
屢惡雨降り
日月光り無く
咸く滋茂せず
國をして饑饉ならしむ

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	全	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
真理の基礎に樹つ佛教の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード(四面)		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢
本尊意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢
機部講事詳釋		全	金壹圓七拾錢
本多日生上人		全	金拾錢
勸行作法		全	金壹圓
河合彰明著		全	金壹圓
皇道と日蓮主義		全	金壹圓

月刊「教」誌
申込所
東京市小石川區音羽町六丁目「教」
振替口座東京一〇九四〇番

發行所
東京市小石川區音羽町六丁目
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

東京市小石川區音羽町六丁目七十ノ六
法團 統一部
東京市小石川區音羽町六丁目
電話牛込九四二〇番

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

▲御申込へ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十二年十月廿七日 印刷納本
昭和十二年十一月一日 發行
(第五百十二號)

不許複製
編輯 統一部 滿事
發行人 東京市四谷區內藤町一
印刷人 山田英二
印刷所 東京市小石川區音羽町八ノ十一
野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

發行所 東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團 統一部
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



統

法財人團
統
一團發行

次 目

本佛釋尊の神通力(前篇).....	本多日生
日蓮宗概観(其十一).....	故梶木顯正
開目鈔講話(第十四講).....	小林一郎
釋尊の御成道.....	礮部滿事
北支より.....	小林啓善
銃後録.....	木田芳雄
記事	

○本部開報

○福島支部報

號月二十年二十四第